

時務への応答2022

名塚 紘一*・徳本 達夫**

A Response to the Current Topics of 2022

Kouichi NAZUKA* and Tatsuo TOKUMOTO**

「私は、さっきの日本海軍の「やましき沈黙」という言葉を大事にしています」(中略)「日常的にも、何か変だと思ったら、言葉にして伝えようと意識することを自分に課しています。言わなくなったら終わりというか、一回、黙ってしまうと、黙っていることに慣れて、次の一步を踏み出すのが怖くなりそうな気がするんです。」

——右田千代¹⁾

「(前略) 学びひたり／教えひたる／それは 優劣のかなた。／ほんとうに 持っているもの／授かっているものを出し切って、／打ち込んで学ぶ。／(中略) 優劣を忘れて／ひたすらな心でひたすらに励む。／(中略) 学びひたり／教えひたろう／優劣のかなたで。」－「優劣のかなたに」

——大村はま²⁾

「この本を読んでくださる方に、私は私の絶望を託しました。だからあとに残ったのはただの海、どこまでも広がる青い海です」

——上間陽子³⁾

【註1】 小黒純・西村秀樹・辻一郎編著『テレビ・ドキュメンタリーの真髓—制作者16人の証言—』(藤原書店、2021年、503頁)。

2) 刈谷夏子『評伝 大村はま—ことばを育て 人を育て』(小学館、2010年)。「学ぶということ、教えるということについて考え続けてきた人が、最後に一番大事にしたことは「ひたすら」ということばだった。結局、生まれてきた限り、ひたすらに生きていくほかない。そうやって、授かってきたものを生かし切って、そのあとはそれでよしと安心するしか、人にできることはない。人生を逢かに振り返って、一人の人間として、はまは静かな気持ちで思っていた。」(567頁)。

3) 『海をあげる』(筑摩書房、2021年、251頁)。「絶望」を託された側の一人としてせてもの紹介。一斉

休校措置への見解も併せて(後掲)。

はじめに

小文は、広島文教教育学会現役最年長・名塚紘一会員に触発されて為った⁴⁾。現代日本社会が抱えている問題及びそのような社会を形成してきた一人としての自己への問いかけである。80歳と72歳。実年齢分の歴史責任は免れない。

冒頭部分は超多忙な読者向けである。以下はその発展と敷衍である。新たに旧統一教会と政府・自民党との構造的癒着が露呈するに至って、時務への応答責任をより自覚するようになった⁵⁾。記名以外の文責は徳本にある。

【註4】 小文は以下の既報の続編である。本誌読者には既に名塚節の一端はお馴染みだろう(名塚紘一・徳本達夫「大学教育考—「はぐくみ」報告への応答」『広島文教教育』第35巻、2020年所収、同「名塚紘一「自分史」への応答」同第36巻、2021年所収)。卒業生も新鮮な感覚を発揮した。読者への呼びかけとして相応の思いを込めた。応答は「はぐくみ」の8人を含め、現時点では私たちの元には届いていない。私たちの呼びかけの熱量不足だろう。今回はいかに。人倫に反する言動を繰り返す「オッサンたち」と同類なのか。自己点検の一環でもある。公的な発信や商品製品には市民・消費者としての応答を心がけている。双方向性が双方の質を高める。この姿勢はここでも変わらない。右田の言は私たちを刺す。思いは共通だが、仕事の質量は足元にも及ばない。「ひたすら」を生きるしかない。「絶望」を感じるほどには生きていないための発信不足か。

5) 本誌の他論文は主題は別としても、世界と日本の根底を揺るがす事態への言及は不可避だろう。旧統一教会という名称は今なお本質は変わっていないため、旧を外す。】

1. 時務への応答2022

コロナ禍、往来は減った。その分、増えた近

* 元本学施設警備員

** 元本学教員

況報告は時事問題への言及が主であった。話題は多岐にわたった。重複を避けるべく、編集し、小見出しをつけた。文殊に匹敵する座談となりえたか。

資料1. 座談会「時務への応答を生きる」

1. 棺を蓋いて事定まる

徳本：学生時代に漱石の「則天去私」という言葉に出会い、精神的安定を得られ、その後棺蓋事定という言葉を知り、よりすっきりしたことを覚えています。周囲の評価に一喜一憂することなく、地道に為すべきことをする、評価は後からついてくる、と。大田堯「教育とは何か」(岩波新書、1990年)でも言及。大村はまの「ひたすら」の心境です。むろん、安倍さん絡みですが。

卒業生：あの事件、びっくり。驚きました。その後の一連の事柄。もっと驚きました。怒りも。どこまで真相解明が進むのか分かりませんが、後味の悪いことです。棺蓋事定は私にとっても大事な指針です。大田本はテキストでしたが、今でも読み返すほど大切な本です。

名塚：これまでにいろいろ言ってきたことがやっと暴かれ始めた感じです。隠されていたことが次々に露になる。もっと深い部分で蠢く何かがあるのではないかな。

徳本：真相解明と抜本的対策を。当然のこととして共通の前提。どんな理由があろうとも事件は許されるものではない。同時に、信教の自由は当然だが、自他を不幸にする自由はありえない。統一教会は似非宗教団体。それを悪用し、被害者救済を怠っていた政府・自民党を主とする政治の不作為。以下はその前提の上です。

名塚：当然の前提ですね。声を上げられない被害者、宗教2世のことも。

徳本：政治の私物化。象徴としての118回の虚偽答弁で国会審議を空転・浪費させた。しかも自己保身のために。その意味では「やっぱり」。「まさか」の人もいるでしょうが。「まさか」の人の声は聞かない。「騙された」派か。

名塚：前回の国政選挙の投票率55.93%。自民党の「絶対得票率」は小選挙区で約26%。

徳本：それが残りの約75%弱の意向を決めている。投票しなかった人たちはどうなのでしょう。「騙されていた」？ 当初、国葬賛成が反対を上回っていたが、統一教会との関係が明るみに出て以後は、逆転。「まさか」の怒りなのか。「やっぱり」の怒りの倍増なのか。

卒業生：「自分史」の中で紹介された、例の伊丹万作の言の出番ですね。【補注：平成30年1月13日付け毎日新聞。映画監督伊丹万作(伊丹十三の父)が『映画

春秋』創刊号(昭和46年8月号)に書いた記事の中の有名な一節。「多くの人が今度の戦争で騙されたと言う。だます者だけで戦争は起こらない、あんなに造作なく騙されるほど判断力を失い、思考力を失い、信念を失い自己のいっさいをゆだねるようになった、国民全体の文化的無気力、無自覚、無責任等が悪の本体なのである。「騙されていた」といって平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でも騙されるであろう。】ニュースにどこまで接していたかですけど。知らなければ考えない。考えなければ判断の質は下がる。あれだけいろいろあったのに。ロシアのウクライナ侵攻。ロシア国内の報道統制下でも、抗議・反戦の声を上げる人びとの存在は心強いです。**名塚**：9月下旬の予備役招集の「部分的動員」でこれまで以上に抗議の声が生まれてきた。国外脱出者も増加中。数十万人とか。

卒業生：これからどうなるんでしょう。声を挙げること。国外脱出もそのひとつ。いつ、どの時点で。1人ひとりが問われているのだと実感できます。

徳本：プーチン大統領、数日か、数か月で決着という、「特別軍事作戦」。シナリオAは早々と破綻したのにBは想定なし。いわんやCは全く。7か月になるのに。停戦状態になるまでは最悪の結果にならないように、国際社会の力が問われる事態です。私も一員ですけれど。最悪はあり得ないという希望的観測は私たちが実効ある動きをしてこそ。行動無しの希望は幻想・夢に過ぎないので。今の行動でも状況は好転の兆しはないし。

名塚：21世紀というこの時代にまさかでした。予想もしなかったことです。見えていなかった。チェチェン紛争やクリミア併合が確かな前兆だった、ということです。今となっては。

卒業生：国連の常任理事国が主権国家を武力侵略するなんて、ありえないことなのに。核の使用が絶対ないとは言いきれないのが現実です。どこまで冷静な判断を？ 杞憂であればいいのですが。

徳本：1962年のキューバ危機の時は中学生でしたが、実際、世界の破滅を予感しました。巻き添えになる理不尽さへのやりきれなさも。何もしませんでした。今、世界は1万5,000発以上の核を抱えている。その現実はある時代を越えている。それをリアルに実感できるようになってきた。世界の緊迫感は比較できませんが。

名塚：ホットラインはキューバ危機を契機に設定されましたが、両国の間にはあるのでしょうか。あの時点での国際社会の対応が良かったかどうか。結果的に誤ったメッセージを送ったことになったということですね。残念です。

徳本：現代史の難しさですが。現在のロシアと大日本帝国の時代を重ねて考えます。国際的孤立を深めた結果の敗戦。無条件降伏。ロシア、独裁的政権は暴走す

るという見本。本当に「核のボタン」が心配です。ウクライナは当時の朝鮮半島、中国、アジアの人びと重なってきます。戦前・戦中、大日本帝国政府の言論・思想統制、弾圧が激しくなる一方。次第に臣民の沈黙が進み、他方で大政翼賛的な風潮に参加していった。それでも異議を唱えた人も。父方の祖父・安倍寛もその一人。非戦・反戦の政治家。

名塚：安倍寛のことはほとんど言わない、岸のことはわかり。

卒業生：そうだったんですね。戦争って、一旦始めると、取捨がつかないことの最大・最悪のことです。歴史の教訓なのに。学べていない。

徳本：最大・最悪のこと、それをすべての前提にできるかどうか。核攻撃被害の実相も大前提。だからこそ核兵器禁止条約が発効した。歴史に学んだ人びとによる学びの成果。条約への関わり度が私たち一人ひとりのリトマス試験紙。

名塚：日本は批准していない、学んでいるとは言えない。「橋渡し」とはいうけれど。

徳本：この座談会もささやかな声上げの一環ですし、試験でもある。本誌でも2年前から時事問題へ言及してきました。名塚さんは80歳を過ぎてなお、社会問題へ鋭い関心を抱き続けておられる。発信したいことが多々おあり。做すべき姿勢です。棺蓋事実は万人のことですが、とりわけ毀譽褒貶の激しかった人ゆえ。

名塚：負の部分が次々と出ているのでこれまでのような過大評価はありえなくなるはずです。

卒業生：評価は長期の視点で、総合的にしないと。現場でも日頃から丁寧に関わっていくことでしか確かな評価はできません。確かな観察なしでは正しい評価はできません。

徳本：功罪を含めて、歴史に耐えられるような評価を。日本の今後のためです。これまでの評価の訂正か、補強か。評価者のこれまでの眼力が問われる。国民一人ひとりのことです。

卒業生：75%の人も含めてですよ。

徳本：選挙権のない、保障されていない人も、です。案外、その人たちが正鵠を得ているのかもしれませんが。だからこそ有権者は投票を！投票率70%超えになると確実に好転する。

2. 恥ずかしくない自分になる

卒業生：さらに15%。私の身近な親族の中には名塚さんのように高齢になっても発言する人はいなかったのが新鮮です。原動力はやはり自分史で語られた3歳の時の引き揚げ時の体験。

名塚：そうですね。実際に生死を分ける経験をしたのでなおさらです。

卒業生：同じような引き揚げ経験をした人はたくさんおられるのに。

名塚：本や証言は多いですよ。戦争を直に体験した人

は亡くなり、引き揚げの体験者は80歳以上。急いで証言を記録する必要があります。

徳本：貴重な証言、ありがとうございます。『文教教育』への遺産。続篇も含めて。私たちができることは、歴史を学ぶことを通してそうした過酷な体験を想像し、教訓とすること。非業の死を遂げた人びとをはじめとする人たちに恥ずかしくない日々を送ること。自分を諫めるもう一人自分、あるいは他者を持ち続けること。名塚自分史の読者として身近なこととして実感できましたが。冒頭の右田さんも、広島赴任時の、被爆者からの問いかけから「恥ずかしくない自分になるうとした」とのことでした。誠実な人。全員が被爆という、人類が初めて味わう過酷な経験をしないと分からないというのではお粗末ですから。歴史から学ぶこと、これに尽きる。堀川恵子さんなどの作品からも。

名塚：加藤陽子さん達の仕事もそうですね。いい本はたくさんあります。

卒業生：名塚さんもたくさんお読みになっている。子どもの頃から「本の虫」。自分史にありましたね。

「恥ずかしくない自分」、そのような思いを感じさせることのできる大人でありたいです。教員という立場からではなく、自然に滲み出るような。歴史の証言からどこまで学ぶか。授業でも戦時下の体験を扱った教材がありますが。どこまで入っていけるか。これまでも語り部の証言に耳を傾けてきましたが。まだまだです。

徳本：蓄積になっているはずですよ。最後は人となりですね。被爆者は、全身から発する強烈なものがある。右田さんはそれを感じ取ることでできる人だった。

名塚：首相時代、被爆者との面会は広島・長崎で何回もあったはずですが。響かなかったのか。

卒業生：どうだったのでしょうか。「あなたはどこの国の総理大臣なのか」、といった被爆者の厳しい声もありましたよね。

徳本：でした。あの声は響いたのでしょうか。

名塚：その自覚、政府の代表という自覚はどこまであったのか。

徳本：あったらもっと別の対応だったはず。挨拶文の内容にも反映するはずですよ。コピペ的でした。

私たちはどこまで自ら信ずるところから発言していたか。重しがなくなつての発言とは違う。抗いにはならない。それでも言えなかったことが言えるようになったのはよかったです。お友達には優遇、反対者には冷遇。分断そのものでした。

卒業生：両極端でした。国のトップなのに。教員があんな対応をしたら、専門職として失格です。政治家は専門職ではないのでしょうか。それでも最低限の資質は求められるはずですよ。

徳本：確かに高い専門性が必要とされる国家資格があるわけではない。あれば何割かは失格かも。先の条約

への賛否にしても。反対ならそれで相応の活動で示すしかない。プラトンは「哲人政治」を提唱。本来は政治家の資質能力の問題。全体の奉仕者としての自覚度の問題でしょう。それだけ責任重大。

安倍さんの場合は家業なんでしょう。どうして国会議員になったのかとの小学高学年か中学生の質問に、父親と祖父が政治家だった、という趣旨の答えは有名です。

名塚：その点、菅さんは稼業か。親族優遇。政治家の2世、3世では何とも。例外はあるでしょうが、小選挙区制が問題です。選挙制度改革が急務です。

徳本：政権交代を意識した制度改革でしたけど、残念ながら弊害の方が大きい。歴史を学ぶことの意義についてはこの後も話題になるはず。生きた歴史の中で私を生きている、同時代史と私とは直結している。私とは80億人の意味ですが。80億人、間近でしたよね。

卒業生：その一人が私であり、プーチン大統領。

徳本：名言！ トランプさんも。むろん、グレッタさんも。その自覚があるどうか大きい。

名塚：対等なのに、ここでも分断。

卒業生：対等さを示す絵本がありました。恰幅のいい大きな大人と小さな子どもが地球の上で釣り合っている。

徳本：子どもの権利条約の絵本。だから、時務への応答が大事になるということなのですが。土台、振り出しの確認です。

3. 言葉・日本語への向き合い方

卒業生：言葉を大事にされなかった。このことは教員として厳しく指摘したいです。教育では言葉を大事にすることは前提ですから。

徳本：全く同感です。私は安倍さんの手垢にまみれた言葉。いつからか使わないように意識していました。使う時は正確に。「まさに」「と同時に」などなど。「そもそも」の呆れるような解釈も。言葉が貧弱。言葉が人を作る。人が言葉を生む。発する主体と言葉とは相似形。うまく編集されたテレビ報道等では露見しないけれど。政治的言語だったのか。日常的な会話ではどうだったんでしょう。直接、話してみたかったです。草取りなんかしながら。

名塚：近くにいた人は概して好意的な評価でしたけど。味方には丁寧だったのでしょうか。

徳本：でしたね。むろん、日常会話が公的な姿とは違ってたととしても、首相職は公人。政治以外の世界の姿をもとに好意的な評価はできないはず。「悪の凡庸」(H. アーレント) という言葉の通り。強力なリーダーとしての役割を演じていたとしても、私が知っているのは、公的な側面のみ。コロナ禍の下、自宅で犬を抱きながらというのも公的な発信でした。

卒業生：そんなこともありましたが。あれは輦ひんしやくを

買いました。追い込まれて困っている人たちのことが見えなかったんでしょうか。

名塚：見ようとしていなかったのではないですか。困ったことでした。

卒業生：子どもが見えないと、教育の仕事は成り立たないです。だから、積極的に観る。見学の見ではない、観察の観。授業見学ではない、授業観察。教育実習の初めが観察実習。その報告会等でも最も大事なことでした。見えなければ始まらない、だから観る。難しいですが。政治の仕事も同じはずだと思うんですが。

徳本：おっしゃる通り。基本中の基本。

名塚：敵・味方と分断すれば、敵は観ないようにする、見えなくなる。

徳本：「こんな人たちに敗ける訳にはいかない」ですからね。観ようとしなない人は人の上に立つべからず。

卒業生：理解とは下に立つ、understand だと。授業で強調された。私たちはその視点で先生方を観ていました、どこまで実際にやっておられるか、と。

徳本：言行不一致はみつともない。

分断もそうですが、さっきも出された言葉の問題。私も、安倍さんの犯罪の根本は日本語を邪険にし続けたことで、結果的に日本の文化、国家を破壊させようとしたことだと思っているんです。同じことを、コラムニスト小田島隆『日本語を、取り戻す。』(亜紀書房、2020年)は言う。「誠実にものを考えようとする人々にとって、無意味な言葉ほど有害なものはない」(311頁)と。

著者は日本語を、取り戻す過程で蠱うぐめくものを嗅ぎ分けて言う。「ところで、安倍さんが恐れている逮捕事案(検事総長の首を無理矢理にすげ替えてまで隠蔽しようとしているできごと)とはいったい何だろう？この腐った人事の向こう側には、どんな犯罪が隠れているのだろう」(108-109頁)と。2020年5月の発信ですが。小状況を持って大状況を想像する。7.8事件以後、当事者からの声は聴けなくなりましたけれど。

名塚：深い闇があったはず。どこまで解明できるか。広島河井克行・案里議員夫妻の公選法違反の事件でもそう。トカゲの尻尾切。いつものパターンです。

徳本：慣らされては思うツボ。誤魔化しや虚偽発言等にいちいち鬱陶うつとうしいと思いつつ、反発していた時間とエネルギー。非生産的なことこの上ない。118回の虚偽答弁による国会審議の時間とエネルギー。税金の浪費。富岳に計算させたいくらい。富岳には不名誉なことでしょうが。企業ならば倒産。損害賠償に値する悪行。怒りと呆れ。諦めを狙っていたのでしょうか。卒業生：学習性無力感ですね。低い投票率はその一つの効果ですよ。為政者が得をする。

名塚：55%程度。低ければ低い程、組織票がものをいう。思うつぼなんです。巧みに。

徳本：それだけに在任中に辞任させられなかった悔いも。ストレスの多い日々でした。今は多少とはいえ、本質的なことに向けることができるようになった。最期は悲惨でした。お悔みしますが。死者に鞭打つは礼儀に反する？

卒業生：ストレッサーから目を背けることで精神的安定を保つ空気も生まれていたのではないのでしょうか。取り除くのではなく。

名塚：だから、根本的な解決にならない。他方で「やっている感」は続ける。巧みでした。

徳本：森友学園文書改ざん事件でも、最後は「認諾」でした。徹底説明を避けての幕引き。卑怯ですよ。司法も機能不全を起こしている。

4. 自浄作用と事大主義・事なかれ主義

徳本：今回のことで彼我の自浄作用の差を実感させられたのは大きいです。前日7日はイギリスのジョンソン首相が閣僚等の相次ぐ辞任によって辞意表明。嘘に嘘を重ねていた首相に異議議出。さすが、議会政治発祥の地。彼方の朗報。片や此方。118回の嘘の連発。それでも続投。黙認。自公政権の本質。

発端となった森友学園問題で佐川理財局長も付度の答弁を重ねた。自浄作用どころではない。結果的に、国税庁長官に抜擢。論功行賞人事。何とも、と思っていた所。酷暑の中、剪定作業の昼休憩時間に届いた速報でした。

名塚：そうでした。速報が次々と。イギリスもいろいろ問題はありますが、自浄作用が働くのは見事です。嘘をつくことは政治上の駆け引きの中であることとはいえ、自己保身のための虚偽。民主主義の精神に反するのは誰が見てもわかる。

卒業生：国民性なのでしょう。日本人の同調圧力が見て見ぬふりを生むのでしょうか。

徳本：三河の見ざる、聞かざる、言わざる。庶民の風刺。でも、封建時代ではあるまいに。

卒業生：変わっていない？ 自分のことと思わないからでしょう。自浄作用の働く学級は健全ですし、児童同士の仲がいい。表面的な仲良しではなく、言い合いもすれば建設的です。陰でこそこそしくなる。授業の中身も良くなります。自分のことと思えるからです。自慢話みたいですが。

徳本：十分、自慢に値します。もっと発信して下さい。

名塚：小さいころからそのような経験が必要です。前に話題になった大阪の小学校のように。

卒業生：大空小学校ですね。同調圧力の中で育つと、空気を読むばかり。一人ひとりを尊重することにはなりません。当事者意識は生まれません。映画と講演会、話題になりましたね。6人からの反応はないのですか？ いろいろ質問も出したのですが。

徳本：残念ながら。現場は忙しいですから。というの

は言い訳になるか。退職の二人は閑人、、、。

卒業生：私も現場の身ですけど（笑い）。

徳本：心底、尊敬しています。お陰で私たちも馬力が出ます。

卒業生：その意味では安倍さん個人だけの問題ではないような気がするのですが。この国の政治の体質のような。

徳本：同感です。安倍・菅的政治が続くことで結果的に熟議や本気が後退した。そのような政治を支持する人たちと安倍政治的なものとは合わせ鏡です。

名塚：「やってる」感は巧妙に大事に出し続けた。見事なもんです。

徳本：「はぐくみ」が嘆いていたように「意識高い系」という揶揄が大事なことをスルーする空気を生む。

名塚：真面目であることを嫌う、足を引っ張るような風潮、困ったものです。

卒業生：大事なことの話し合いは真剣さや真面目さが土台にないとできない。当事者意識の前提です。授業や学級づくりで意識しています。ユーモアも忘れてはいけません。

徳本：私たちもユーモアを。で、事大主義・事なかれ主義。寄らば大樹の陰。責任を負いたくない。

名塚：伊丹万作が批判した無責任体制そのものです。戦前・戦中の時と変わっていない。

卒業生：「騙されていた」と言えば、責任は問われない。騙されていた自分の責任はあるのに。スルー。恐ろしいことです。

徳本：全体主義はこういう土壌の上に生まれるのでしょうか。全体主義の土壌は既にあると思いますが。安倍亡き後、私の中では重苦しさは減りました。右田さんの言の通り、変だと思っても口を拭うことは罪。官僚だけではない。支持者も付度？ 実利があったのかどうか。いろいろ利権構造はあるのでしょうか。しがらみ？

卒業生：純粋な「推し」は別として、利害が絡む世界なんのでしょうか。全く分からない世界ですが。

徳本：河井案里議員絡みの公選法違反（買収）。金を返すことは立場できなかつたと多くの地方議員の弁。広島県内の議員たち。『中国新聞』が特集記事を連載していました。政治風土的に汚染されているんだな、と。4半世紀過ぎた広島。他人ごとではない。森友学園問題にしても当初は、安倍昭恵さんが絶賛。自分たちに不都合になってくると、手の平返し。人格を貶める。絶賛は何だったんだろう、と。そして、籠池夫妻は獄中生活。権力には逆らえないという空気。名塚：酷いですね。国民には怖いことだと思わされた。

徳本：絶対権力はここまでやるんだ、やれるんだという圧力。それでも怯まなかった人びとも。今もお。軸・芯があるか否か。「私」はどちらに近いのでしょうか。

5. 応答する身体

徳本：本来は、本質的なことこそ最優先させて応答を繰り返すのが大事なのに。裁判でも実質的な審議をすべきなのですが。応答する身体とは、わけても時務への応答です。それが声上げ。とりわけ危機的な状況の場合です。沈黙・黙認は共犯・幫助です。右田さんの言葉を自分のものにするには強い意志が要る。歴史への責任ですが。

卒業生：黙る、黙るようにさせられる、そのような状態にならないためにも、ですね。真相を解明するためにも。小さなことでも手を抜くというか、慢心すると、教室がだれてきます。

名塚：反対の声はそれなりに効いていたはずですが。沈黙が一番だめ。飼い慣らされるかと終わります。小さなことでも声を上げる。だから投票なのですが。投票率は低いまま。

卒業生：非力、微力であっても、無力ではない。これが確かな支えです。形にするのは簡単なのに。

名塚：そうです。小さなことから。現場では慢心、マナーが一番危ない。毎朝、安全確認作業、始業時に確認することです。唱和して。それでも事故が起きることがある。

徳本：機械は故障する、人は間違える。今、労災事故の4割以上が65歳以上の人。1億総活躍どころの話ではない。72歳の私にとっても他人ごとではない。草払い機で草刈り、剪定。

名塚：気を付けて下さいよ、本当に。

徳本：ヘルメット着用。講習会の受講義務。

卒業生：安全確認は絶対。小さなことを大事にする。神は細部に宿り賜うですね。同じことですよ。しっかり残っています。価値選択の主体性もそうですけど。

徳本：小さなことにも気を使っています。油断しない。意識しています。

名塚：一つ一つの積み重ねが基本ですから。慢心が一番危険。これまでも何度もでしたが、安倍政治は嘘の連続でした。人柄がそもそも信頼できない。

徳本：それでも政権支持率40%台を維持でした。からくりがあるのか。内田樹さんは、安倍さんの嘘は性癖といっています（望月衣塑子・特別取材班『安倍晋三』大研究』KKベストセラーズ、2019年）。その上で私たちの問題を衝く。「(問題は、)嘘をつくことに心理的抵抗のない人物、明らかな失敗であっても決しておのれの非を認めない人物が久しく総理大臣の職位にあって、次第に独裁的な権限を有するに至っていることを座視している日本の有権者たちのほうです。いったい何を根拠に、それほど無防備で楽観的にしてられるのか。僕にはこちらのほうが理解が難しい」(209-210頁)。全く同感です。しかし、そのような捉え方をする人は少数派。

同書の「まえがき」に以前、私自身、違和感を抱い

ていた事実が記載されていて。NHKラジオの『日曜討論』。辺野古埋め立てに関わる環境保全について問われた場面での安倍首相発言。「あそこのサンゴは全て移していますから」。えっ？ そんな馬鹿な、と疑念を抱いたまま。今回、納得。本では翌日の琉球新報の検証記事。ファクトチェック。埋め立て海域全体で7万4000群体の移植が最低限必要、と。安倍さんの説明では9群体。0.012%を100%と強弁する。自己の利益は過大評価。不利益は過少評価。怖いものなし。精神は絶対安定。

卒業生：いやー。驚くべきことですね。ありえない。

徳本：恐るべき数字。自信たっぷり。断定調の物言い。

名塚：そんなこともありましたね。誤りを指摘されても、しれっとしている。訂正しない。それで通る。

徳本：言葉が響いてこない。誠実さが感じられない。身体言語そのものがその人の人となりを体現しているのに。

卒業生：声はその人ですから。隠しようがない。

徳本：生身はごまかせない。私もですけど。

卒業生：ファクトチェックは時間がかかる。嘘・フェイクであっても言ったもの勝ちみたいな空気になりかねない。相手に届く声とは真実を誠実に語ってこそです。

徳本：現職時代、ある学生が怒っていました。山口県出身の総理大臣、悪く言わないで、などという学生がいる、と。それを受けて、全体の奉仕者、公の性質といったことを再度説明したことがあります。

名塚：そんな感覚で政治を見ている学生もいるんですね。批判できた学生は立派ですが。

徳本：私も山口県出身ですけど。同郷意識？ 困ったものです。全体主義の土壌です。

6. 沈黙という幫助、共犯

徳本：先般、裁判員裁判を傍聴。傷害致死幫助、死体遺棄の容疑。この国を痛め続けた安倍・菅自公政権8年8カ月。賛成はもとより、反対を具体的に示さないと幫助の責任を、法律的にはともかく、人倫上は問われるのではないですか。私も含めて。珊瑚の群体については進行形ですから。瀕死・死滅の状態であれば、死体遺棄の共犯ともなりかねない。教育学教授の上間陽子『海をあげる』(筑摩書房、2020年)は、瀕死の海が発する声への共振からの悲痛な声。

件の裁判は、知人に暴行する夫を制止する、諫めることができなかつた妻の行動を巡る審理。上下関係の下、従属する側にいると、制止や声上げができない。対等な関係であることは双方にとって暴走を防ぐ大事な条件。私(国民)と国家とは対等の関係なのか。大日本帝国時代ならともかく、日本国憲法下、国家への従属などありえないはず。でも「安倍一強」という意識で事大主義を生きていけば、結果的に従属。

国家の暴走は止められない。安倍政治が作り続け、国内に蔓延していると思われるほどの学習性無力感。「平和な国家及び社会を形成する」国民としての意思と能力を欠く時、補助や共犯に陥りかねない。それでも罪が明示されない限りは、同時代的には罪は問われないのでしょうか。

名塚：無責任体制は、国民が加担していたことの結果です。総動員体制が現代の戦争ですから。今は戦争そのものではないですけど。無意識のうちに無責任体制を担っている。責任を放棄している。

卒業生：いじめの放任も同じことです。観衆や傍観者が解決の鍵を握っていることは共通理解です。4層構造。責任を意識すれば、観衆や傍観者ではいられない。対等だから。

教員と子どもが対等でない、教員のいない所ではけ口を作ってしまう。

徳本：同感です。日本学術会議からの105名の新会員候補推薦者のうち任命拒否にあった6名の一人、加藤陽子は言う（『この国のかたちを見つめ直す』毎日新聞出版、2021年）。「危機の時代には、国家と国民の関係を国民の側から問い直し、見つめ直すことが必須となろう」（4頁）、と。また「歴史の真実は、人間の行動の記録として残された事実だけで成り立っているのではなく、人間が書いたり発したりした「言葉」に現れた知性の営みの中にもあると先哲は教えてくれている」（280頁）、とも。学術的根拠に基づく真つ当な批判。菅義偉首相（当時）も不名誉な足跡を残したものです。高を括っていたのではないか。今なお、理由の説明なしです。「総理大臣も国会議員も辞める」という、安倍さんの啖呵も。今回、みんなが知るところとなった統一教会関連団体への賛辞のメッセージも。「知性の営み」の欠如。選挙のための寄生？

名塚：慢心は墓穴を掘るという好例です。時間はかかりましたが。地方議員も含めて真相解明と根本的対策を。どこまでできるか。

徳本：私が尊敬する、国会議員を務めた田中秀征は、統一教会からの支援の誘いをいかがわしいから断った、と。NHK ラジオで述べていました。関わった政治家たちは腐臭を感知する能力が低下、機能不全を起こしていたのでしょうか。

1990年代当時は各地の大学で「原理研究会」が活動していた。いつの間にか名前を聞かなくなっていたので活動しなくなっていたのかと。うっかりしていた、情けないことです。名称変更はそれほどの価値があるとの判断からの変更手続き申請。その経緯の説明は説得的とも思えず。

名塚：手続き的には問題はなかったという説明ですが。真相は不明です。

徳本：手続き問題に至少？ この点でも再度。

7. 長生きという歴史の証人

徳本：私はある方よりも長生きをしたいと、数年前より願って生きてきました。私の方が4歳年上。その方の政治手法には反発を感じる事が多く、それなのに、国政選挙はその人達の6連勝。全勝。反発を感じる私たちが間違っているのか。そんな思いになりかねないほどでした。襲撃による最期。残念でした。

名塚：警護の問題は大きい、あの場所を選んだことがまずは間違い。

卒業生：360度は広すぎましたよね。警護を万全にするには相当の動員が必要だったはずですよ。

徳本：市民感覚としては、恨みを招かねば、過剰な警護は不要。通り魔的な無差別殺人襲撃ではなかったのですから。選挙活動は有権者に生身の自分を曝け出し、政策を誠実に訴える。有権者の声に耳を傾ける。真剣勝負の時空のはず。有権者の野次にも謙虚に耳を傾けるべきです。野次は野火に似ている。

名塚：手紙に書いたことですが、結果は出てみないとわからない。真相の解明も同じですが。

徳本：緑のカーテンの件、今年是不調とか、残念でしたね。昨年の大収穫からすれば大異変。猫の糞による化学物質が原因だとすれば、私たちは食品添加物まみれ。空恐ろしい話です。真相解明は土壌分析をすれば明快。片や、安倍政権の真相は官邸等の付度で分析困難。記録無し・廃棄・改ざん・隠べいがあったら真相解明にはほど遠い。この問題、底知れぬ暗部があるのか。保守や右翼の人は怒らないのでしょうか。当初の報道は民主主義への挑戦、破壊とか。言論の自由への抑圧などと。逆説的でした。

卒業生：この問題、どこまで危機感を持つことができるかです。関心はかなり高くなっていると思います。最後まできちんと解明を。

名塚：それまでの「やっている感」は暗い部分を隠すための方策。巧妙でした。それだけに深い部分があるはずですよ。

徳本：まんまと乗せられてきた。支持者には痛苦はあるのでしょうか。私的な恨み。塙の中なら絶対安心。それだけの犯罪があったのかどうかは闇の中。内閣総辞職に値する不祥事は何件もあったのですが。不問。岸・晋太郎・晋三の三代。安倍寛の系譜ではない。

卒業生：その意味でも内田さんの指摘は痛いですね。

徳本：唄を忘れたカナリヤは唄を思い出すので大丈夫ですが、怒りを忘れた有権者は、茹でガエルの道。亡国への道。非業の死者に顔向けできない。

卒業生：居心地はいいんでしょう、だから気づかないのですが、これが問題ですよ。

名塚：茹でガエル経験はあるのに。私の場合は、3歳の時の体験。大人たちの巻き添えでしたが。子や孫に同じ思いはさせてはいけないという思いで生きてきましたから。

徳本：敗戦と原発事故。77年前と11年前。後者は同時

代のこと。前者も歴史的には別世界のことではない。彼とは4歳違い。たった4年なのに時代感覚の差は4年以上と錯覚するほど。何が違ったのか。歴史からの学びの差なのか。

名塚：生育歴の違いは大違いです。経験も全く違う世界を生きてきたので当然でしょう。

徳本：68年間、同時代を共にしたのに。「地球儀を俯瞰する外交」に象徴される経験値との比較はそもそも成り立たないとはいえ、同時代を生きているという感覚が得られなかった。支持率が高かったということは共鳴する人が多かったということでしょうけど。やはり内田さんが言うように、安倍さん個人の理解よりも、安倍政治的なのが幅を利かせている日本社会のことを理解する方が肝心です。

名塚：安倍政治に関しては賛否さまざまな本が出ました。これからも。

徳本：正当な評価の材料がどこまで出てくるか。

かねてよりスーパーコンピューター「富岳」に、危機管理における菅直人と安倍晋三の比較検討をさせたいと思っていたところ、尾中香尚里『安倍晋三と菅直人－非常事態のリーダーシップ－』（集英社新書、2021年）が出た。快著です。3.11の原発過酷事故の際の菅、コロナ禍の安倍の比較。それぞれの非常事態に対して、菅は最悪を想定して対策を打った。他方、安倍は最小を想定した。結果的に対策が小出し、後手になった、と。象徴的な例として対照的なのが「国会に対する姿勢だ。通常国会を延長せずに閉じた安倍首相と、70日間の延長を行った菅首相の違いは、強く意識されている」（288頁）。『「力とカネ」の使い方に対する『たしなみ』のなさ』は、この政権の一貫した姿勢と言っている（267頁）等々、尾中の指摘は鋭い。全く同感です。

再度、忘れてはならないのは、東京電力福島原発1号機の過酷事故の実態です。優れた報告書の代表的な一冊、船橋洋一『カウントダウン・メルトダウン』（上下）（文春文庫、2016年、単行本2012年文藝春秋）で船橋はNRC担当者の言を記す。「人類の歴史の中で、フクシマは『自然と物理学』との戦いを極限まで強いられた戦場だった。戦争の一步手前、しかし、戦争よりある意味ではもっと過酷な試練だった。戦争では降伏という選択がある。しかし、フクシマはそんな贅沢は許されない。自然と物理学とどこまでも戦い抜く以外ない。サンフランシスコ大地震からスリーマイル、あるいはチェルノブイリまでの70年間の試練をフクシマではわずか7日間で経験した」（下、531-2頁）。

長く引用したのは、民主党政権時代を「悪夢のような時代」とこき下ろす安倍さんの評価が根拠薄弱であることが明確になるから。それほどの過酷事故、最悪の場合は東日本核汚染危機もありえた際、安倍議員は当時、「海水注入中断事件」を「万死に値するミス」

と断じ、菅政権を揺さぶろうとした。本来ならば、国会議員として与野党を問わず事故対応への責任を担うべきなのに。その後、安倍議員によるデマであることが判明。船橋は言う。「海水注入中断事件を政局にしようとの自民党のたくらみは頓挫した」（上、211頁）。

「リーダーシップのあり方からすれば、おそらく菅は落第点をつけられてもしょうがないだろう。にもかかわらず、菅がいなければ、『日常モード』から『有事モード』への思い切った切り替えはできなかっただろう」（下、533頁）。尾中の見解も同様です。

非常事態対応よりも政局を優先した安倍議員。「非常事態に強い」との自己宣伝はコロナ禍対策で馬脚を現した。イメージでは強力。現実には無力。「70年間の試練をフクシマではわずか7日間で経験した」菅政権とは違って対応する時間はあったにもかかわらず、です。＜モリ・カケ・サクラ＞事件への対応を優先していた。自己保身の極み。

卒業生：事実在即してみると確かに対照的です。トップリーダーの差、同じ物差しで比較することで見えてくるということです。実際、学校現場では最悪を想定して危機管理をしているのに。

徳本：ハインリッヒの法則ですね。ちいさな危険を日頃から摘み取っていく。

名塚：ヒヤリハットの観点です。労働現場の基本です。

徳本：結局は、現場を知らなかったということ？ お膳立てされた現場だったということ？

名塚：二人の経歴の違いが決定的だったのではないですか。市民活動家と政治家3世。

徳本：現場が見えていたかどうか。現実か、仮想か。大事なことは、フクシマの検証が可能になったのは資料があった、当事者への聞き取り等ができたから。当事者たちも自発的に証言を公表しています。歴史に対する誠実な態度。船橋が高調するように「検証なくして真実なし。真実なくして教訓なし。教訓なくして備えなし」（下、578頁）。

安倍・菅政治は記録無し・改ざん・隠ぺい・破棄に執念を燃やしていた政権。しかもすべて自己保身のため。敗戦後、関係書類の焼却に躍りになった大日本帝国の悪しき先例を安倍・菅政権は踏襲中。近現代史の歴史的検証を妨げてきた重要書類の焼却。

「こんな政権」の存続を許し続けてきた最近の日本国民は、少なくとも批判しなかった者は、証隠滅補助の罪に値するのではないですか。「アンダーコントロール発言」を許容したかどうか。

名塚：世界は分かっていたのではないですか。どうなんでしょう。

卒業生：それでも誘致された。東京オリンピックの裏が明らかになりつつありますが。アスリートたちの活躍に泥を塗る。失礼ですよ。

名塚：菅さんは全く知らなかったのでしょうか。

徳本：再度。内田樹さんが強調する、安倍政治が長期政権を続けてきたということの背景。恐るべき社会実験の被験者になっているということ。しかも自発的に。利権に暗躍する人にとっては、安倍政治的なものの方が有り難い？

名塚：これもどこまで真相解明となるかですが。

徳本：2020年の辞意表明。持病絡みは気の毒ですが、自らの嘘に身体が悲鳴を上げたということは皆無なのか。心身は一体のもの。尾中さん同様、演出された辞任劇には違和感ありでした。志半ばで病に倒れた悲劇の宰相という図。

私の亡母も、持病の件は気の毒がっていましたが、118回の嘘の件を伝えると、怒っていました。1925年生まれ。普通選挙と治安維持法とがセットで制定された年の生まれ。1945年、敗戦後初の女性選挙権行使の世代。尋常小学校卒の学歴の母は政治への関心は高かったです。

名塚：多くのマスメディアも一体となって辞任劇演出を報道しましたから。政権の放り出しは2回目。2回目の方が酷かった。

徳本：政権担当最長記録を計算？ 空白期間がありましたから。それでも辞任後は「核共有」などと活発に発言されていた。2年後に凶弾に斃れたこと、その後の真相、亡母は何と言ったでしょうか。怒りか。

8. あの受験生のことも

徳本：大学共通テスト流出事件を起こし、偽計業務妨害の非行内容で家裁送致された女子受験生（19）が、保護観察処分の決定を受けた（毎日新聞2022年9月21日付け）。最初の報道では「魔が差した」などと供述。次第に「計画的かつ巧妙な犯行で悪質」（朝日新聞2022年9月21日付け）であることが判明。魔と用意周到とは相容れない。巧妙な手で不正を働いても、露見しなければ「やったもん勝ち」のような感覚。安倍政治的な臭さを感じました。情けなさも。当初は男子の浪人生かと想像。私の中の偏見ですね。大阪府内の大学生。

最初の報道以後、関心を抱き続けてきた。仮に本学入学生であった、私が現職であったと仮定して、あのような行為は本学の教育の質が根底から問われる、との思いから。文教も、第一志望学生だけではない。だからこそ、入学後に大学名ではない、どのように学んだか、学びの質が問われるのだ、そのような質の高い学びの時空が眼前にあるという実感を味わってもらえるような授業、大学の学習環境を、と。それでも初期の志望を目指すなら応援したい。他大学での学びにも資するような学びの意思と能力とを身につける手伝いのできる大学でありたい。そんな意識でやってきた自分への問いかけ。

で、再受験だったと。籍だけの仮面浪人だったのか、ある程度の期間、学生として学んでいたのか。後

者だとすれば、当該大学の教職員は複雑な心境だろう、と。学びの質が大事ということは伝わらなかったのか。現役大学教員は本事件をどう受け止めたのだろう。話題にしてみたい。

卒業生：学びの質。最終的にはどのような学びをしたかです。第一志望大学の方が志望職種に直結しているということ？ 大学名？ 大学の教育力？ それでも最後は学生の学習力のはず。学力試験でも面接でも有利ということ？ 同じ職業を目指す学生同士の相乗効果狙い？

徳本：大学での総合的な学びは、面接評価で測られるのではないですか。面接官の力が問われますよね。

卒業生：就職対策の面接の練習、多くが単一方式。網羅的な質問で繋がりがなかったです。

徳本：学生の全体が立体的に見えてくるような面接を心してきました。単一方式だと、いくらでも取り繕える。ほろはでない。逆に受験生の深い部分は見えてこない。誤った評価をする恐れも。もったいない。

卒業生：そんな取り繕う人が教員になって、子どもに何が語れるのでしょうか。誤魔化しのテクニックでもないのでしょうか。身を護る時の嘘は必要ですけど。馬鹿正直だけでは不可です。

徳本：閻魔さんとどんな面接を？ 付度する官僚はいない。最期はただ一人で向き合うしかない。審問。絵本『地獄』（風涛社、1980年）という絵本は教訓たっぷりです。小4の時に読んで震え上がったほど。同じ本だと思いますが。

118回の嘘を巡って、母と地獄のことを話題にしたことがあります。単純明快な回答でした。

名塚：入試にしても、巧妙に不正ができる環境はますます整っていますから。防止策はいちごっこでしょうね。

徳本：生きることは閻魔さんとの最終面接に向けての修行ではないか、とこの度、思った次第です。真剣に自覚的に生きないと、最期の面接合格は難しい。応答する身体とはおのが身体。逃げも隠れもできない、地獄の閻魔大王と対峙する時のように。身体的応答を自らの身体で行う。付度は断固拒否する。他人に尻拭いをさせるつけは大きい。

地獄に行ったことのない私が言っても説得力はないですが。怖さが自制になる、逆に希望が自制と原動力になるような生き方を。親鸞的に言えばどうなるのでしょうか。

卒業生：善人、悪人ですね。考えたこともなかったです。評価の問題は、私自身の仕事の上でもついて回ることです。力をつけるお手伝いをする、単なる評定ではなく、次に繋がるものとしての評価でありたい。

徳本：演奏家の実力評価等でも実績は出ています。アンコンプレックス・バイアス。無意識の思い込みから解放された評価方式です。そこでは性別バイアスが働いていたことが判明。

卒業生：ニュースになっていましたね。時代は前進し

ています。

徳本：その人の総合力を先入観なしに評価するやり方を広げないと社会的損失。私自身、受験生の面接は幾度もやりました。本人を立体的に理解したいと努力はしましたが。眼力が歪んでいたら、本人・大学双方の損失。

余談ですが、私自身は第4志望。受け直しもしばらくは考えたものの受験勉強の厳しさにどこまで耐えられるか自信がなかったのと、手応えある授業や本との出会いも大きかったですね。再受験していないので比較はできませんが。後悔していないのは、これよかったですという証。件の学生は私の想像を超えるほどの第一志望だったのか。強い希望は尊敬しますが、その分、受験勉強はどれほどしたのだろう。不正を考える計画性、実行力。不釣り合い。コスバ、費用対効果を考えたからか。

卒業生：あるでしょうね。社会がそんな価値観ですから。でも、後悔するかどうか。その場でその時々で全力を尽くす。本気で生きれば、後悔はないでしょうから、と胸を張って言えるような人生を送りたいです。**名塚**：私も80歳ですが、自分史で書いたように、その心境で生きてきました。手間暇かけた分しか、いい結果にはならないという実感はあります。やりすぎて、指が動かなくなったことは書いた通りですが。

徳本：塗装の匠。最後の最後は、棺蓋事定です。

今回の件で来年の受験案内には不正があった時の警察への通報の可能性が明記された。結果的に歴史に不名誉な足跡を残してしまった。安倍政治的なものの腐敗部分が浸透しているということ？ 忬度官僚の出世を見せつけられたら、地道な努力が馬鹿らしくなる？ 責任転嫁はみつももないですが。本音を腹藏なく綴ってほしいですね。

卒業生：彼女、時事問題をどう捉えているのか、向き合っているのか。知りたいですね。自分のことしか見えていないわけでもないのでしょうか。結局は公正・公平な評価の問題なんですな。

9. 健康長寿は社会参加と共に

徳本：長生きはするものだ実感中。私の想定を超えた歴史的事件との出会い。応答を迫られ続けていますが、その分、本気で向き合おうという気が起きる。多方面で誠実に仕事をしている人びととの出会いからも勇気もらっている。元気の元。72歳。尊敬する大田堯の著書のひとつ『教育とは何か』（岩波新書、1990年）は、大田72歳時の作品。その次元には到底到達できないにせよ、志は倣いたい。『広島文教教育』への現役投稿に関しては名塚さんに倣います。

名塚：私は今年が最後だと思っていますが。身体の方も万全ではないですし。

徳本：健康寿命を維持するためにも鋭い社会時評を続けて下さい。悪政によるストレスは健康の敵。悪政を

撲滅して健康寿命を延ばしましょう。宣伝文句みたいですが。自殺する人、特に若い女性たちの自殺が増加中という痛ましい数字があります。めげずにやりましょう。

卒業生：一緒に。力を合わせて。若い女性の自殺は他人事ではありませんから。お二人との年齢差は縮まることはありませんが、比率的には近づいているところ。いろいろ考えるとところがあるのは、現職を続けているお陰です。

名塚：最後まで全うして下さい。自分史で書いた通り、いろいろな職場を体験してきました。定年退職後も。文教女子大学が最後でしたが、職場体験から学んだことは多かったです。

卒業生：名塚さんの文教時代は、高校生や大学生との出会いが紹介されていて、暖かくなりました。基本は人間関係。教員生活で実感しているところです。

徳本：是非とも、実践報告を。私たちも書き続けましょう。口約も公約ですから。契約違反にならないようにしないと。

卒業生：私も、健康寿命維持に励んで、、、（笑い）。

徳本：長さと同時に幅広さも。その点では経験の豊富さは必要です。私も貧乏学生時代、アルバイトは18種類体験。ガードマンもその一つ。1コマ分の話題。

卒業生：沢山されていたんですね。私もそれなりにやってきましたが。数が違う。

徳本：生活費稼ぎのバイト。勉強だけだったら、どんな教員だったか。幅の狭い、底の浅い人間に？

現職時代は40年間、教職1本。名塚さんたち、同業者以外の人びととの出会いのおかげで少しは人間の幅が広がりました。本もですが。その一冊。堀川恵子『暁の宇品—陸軍船舶司令官たちのヒロシマー』（講談社、2021年）。広島が原爆投下の候補地としてあり続けた理由を堀川は探る。「日本軍最大の輸送基地・宇品があったからである」（7頁）と。そこに描かれた「船舶の神」田尻昌次陸軍中將。軍人になる以前に多様な職歴を経ていることが戦局を大局的に捉える背景になったことを堀川は強調している。軍歴だけの上官等には田尻の上申書は受け入れられず。最終的には敗戦。堀川は現場指揮官の資質を問う。「現場の指揮官として問われるのは、冷静な観察力と判断力。それを養うには理論的な思考が欠かせない。理論的思考は、いつときの感情の昂ぶりによって判断を誤ることを制御してくれるというのが、田尻の持論であった」（59頁）。精神主義の指揮官とは対極的。精神主義はお気楽。

アルバイトといえども、手抜きはなし。本気だった分、学びもあったと今、思うところです。

卒業生：原爆投下に関わる事実、はじめて知りました。宇品が関わっていたんですね。手抜きなしのバイトは同感です。

名塚：今の宇品は、旧国鉄宇品線のことも含めて、か

つての戦時中の面影はありませんけど。堀川さんの仕事はすごいですね。

徳本：堀川本はどれも圧巻です。是非。【註：山口市と下関市も17の原爆投下候補地の中に入っていた。山口市が選ばれていたなら、私は今、いないだろう。広島・長崎に対する負い目のような感覚の背景だろう。】
名塚：アルバイトのことはどうだったのでしょうか。記述はなかったですね。そもそも必要もない。

卒業生：その分、社会経験、人生経験は狭くなる。何事も無駄なことはない。このことはあらゆる仕事に当てはまるはず。高い山は裾野が広い、でした。私たち皆、砂場で体験しているはずなんですけど。

10. 支えとしての先人の身体

徳本：裾野を広げるにはいろんなことに積極的に関わっていくことが必要なのに、特に政治の分野では学習性無力感を学ばされてきたのが私たちの安倍・菅政治の時代。2014年総選挙、「この道しかない」宣伝。異論の可能性封じ。思考・判断停止という温床設定。何とも。

卒業生：心理学で学んでいたことが現実の政治の世界で行われていたんですね。温床の中の茹で蛙。ため息というか、嘆息というか。

徳本：それでもへこたれそうになった時は、大田さんやアフガニスタンの中村哲医師のことを思う。哲さんのような生き方はノーベル平和賞級。「医療に恵まれないパキスタンで一粒の麦になりたい」。活動の動機が活動の質を決める。1984年、パキスタン・ペシャワールの病院に初めて赴く際に語った言。中村医師の言をまとめた『希望の一滴 中村哲アフガン最期の言葉』（西日本新聞社、2020年）。私は、次の一節に打たれる。「あまりの不平等という不条理に対する復讐でもあった」。私憤を公憤に変えていく。賛同者が次第に増えていく。愚直な誠実な取り組みに励まされてきた。医療、井戸掘り、用水路建設等。7年かけて完成。

天寿を全うして哲さん流の「復讐」の成果を人生の最期まで見続けてほしかった。あの時、神は居眠りをしていたのでしょうか。

卒業生：本当に残念なことでした。犯行の真相は今なお不明です。事業が続いているのは本当に希望です。

徳本：この度、映画にもなったのですが。編集の田中直子さんは、「中村医師は世界に誇る偉人ですが、決して超人的な力を持つスーパーヒーローなどではなく、我々と同じ「人間」だということを、改めて感じました」と（『読書推進運動』No645、2021年8月15日）。確かにそうなんだけど、何が、どう違うんだろうとも。

哲さんが本質に即した仕事をし続けたのは、徹底した現場人だったことが決め手。中村哲・澤地久枝（聞

き手）『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る—アフガンとの約束—』（岩波書店、2010年、岩波現代文庫、2021年）。「自然のリズムで、汗を流して働くというのは、非常に健康で、心身ともにさわやかな感じがします」（170頁）。現地活動の意義を「確実に人間の実体に肉迫するなにものか、（中略）私たち自身の将来に益するところがある」（285頁）。

哲さんの印象を澤地さんは記す。「小柄な、やわらかい物腰、静かな声でゆっくり話す人であった」と。凶弾に斃れた中村哲医師。惜しみて余りある。人類、生類の損失。超多忙な中村医師へのインタビュー。限られた時間を最大限有効にした澤地の徹底した事前準備の成果。表紙の笑顔。自然な内から滲み出る。取り繕って生まれるものではない。結局は日々の一瞬一瞬の、日常の積み重ね。不条理・不正義への「復讐」心は底知れぬ馬力を生む。

卒業生：容疑者の襲撃。用意周到に。中村流の「復讐」ではなかったのは本当に残念です。

名塚：爆弾では多数が対象になるので拳銃に変えた、とも。賢明な判断でしたが、問題を社会的に取り上げる仕組みがあれば事件にはならなかったはずですが、政治に対する信頼がなかった。容疑者も大学進学への夢も断たれ、絶望のどん底だったのでしょうか。

卒業生：名塚さんは、戦争で翻弄された幼児期の原体験があったから政治批判が生まれた。

名塚：批判は社会の仕組みの中でやるしかない。組合活動が盛んな時代でした。様々な社会活動がありましたし。私も参加しました。

徳本：そのような仕組みを活用する、なければ新たに作る。被害者救済法案がいずれ審議されるはず。どこまで実効性があるものになるか。問題を放置してきた政治の不作為。他方で、票や選挙運動の応援欲しさの作為。救済法案の審議の他に政治との癒着の真相解明と禁止や罰則規定の制定も必須ですが。

名塚：私たちがどこまで声を上げるかにかかっているのですが。

徳本：先ほども触れた通り、今は、草取り・剪定・草刈りなどの頼まれ仕事。今年も酷暑。その中、2リットルの水分補給では足りないぐらいの汗をかきつつの作業。ご高齢の依頼人の安心顔がご褒美。時給は別として。結果が目に見えるのが快感です。

名塚：分かります、その感覚。現場だからこそです。でも、「もう少し」は危険です。要注意です。

卒業生：子どもたちにも掃除等の身体活動を大事にしています。やった分だけ、確実にきれいになるという実体験。これは大きいです。

徳本：草抜き作業をするなかでこの仕事、AIロボットに代替可能か考えるところ。結論、不可能。手触り、両手の作業の巧な共同作業等、究極の目と手の協調運動。AIにとっては草花の分別は完璧とはいえ、実際の作業は人間の手触り的な次元ではできないので

はないか。

政治家は草抜きのような手作業はどれくらいやっているのだろう。大邸宅、あり得ないか。身体作業は頭でっかちの人間を生まないための最適手法。手抜きはそれこそ、手抜きとして自分に返ってくる。

名塚：狭くても畑仕事は塗装作業とは違った手応えがあります。たわわに実った光景は格別でした。それだけに今年はがっかり。

徳本：その点では経験の貧困は「無知」と「無恥」を生む。身体作業や現場を大事にする人は安倍政治をどう評価したのか。選挙対策にビッグデータを集めて分析しているはずですが。

11. 2022年という年と自己直視

徳本：2022年という年は現時点で世界的にも国内的にも時代を画す年として記憶される。ロシアのウクライナ侵略、7.8暗殺事件を契機とする自民党の統一教会との構造的癒着の問題。ともに「終りの始まり」かどうか。事実が次々に明らかになる中、限られた情報をもとにした見解ですが、自己直視から新しい地平は生まれるはず。後知恵にならないように。

卒業生：大変なことが子どもにどんな影響があるのか。子どもにどう関わっていくのか。実践がますます問われます。コロナ禍の影響も。

徳本：大変な時代。それだけに本気で考える。自己直視のここが出発点。これまでの通り。

卒業生：幼くして時代に翻弄された経験ゆえ、名塚さんの思いの一端は資料の通り。これまでも手厳しい批判が展開されていました。

名塚：真相解明は不十分なままだし、国葬儀も強行。

徳本：知り合いの若者が語っていたのは、安倍さん、存命であつたら統一教会との関係もうやむやになっていたのではないかと。

名塚：検察庁人事に介入しようとした経緯があるのだから、そう考えるのは自然ですね。

徳本：政治の私物化。自身の逮捕を逃れるためとも思われるほどのなりふり構わぬ介入騒ぎでした。まさか統一教会との関係なのかどうか。

卒業生：容疑者とは世代が近いですし、宗教2世問題は深刻です。真相解明と2世支援・被害者救済を望みます。

徳本：例の「認諾」という決着の付け方だって自公政権はやる。容疑者の精神鑑定はどこまで進んでいるのでしょうか。裁判は避けたい？

卒業生：まさか。でも、どうなのでしょう。

徳本：安倍・菅政治的なものへの問いかけは同時代を生きる者にとっては避けられない時務です。名塚さんのようにしつこく。諦めずに。

名塚：本質を明らかにする原動力は国民の意識。

徳本：その国民の意識に関して前川喜平『権力は腐敗する』(毎日新聞出版、2021年)。

名塚：『面縦腹背』の続編ですね。

徳本：腐敗の隠蔽、言葉による国民騙し、国民の目くらし、「敵ではない者を敵だと国民に思い込ませて国民の目を逸らす、官僚には文書の廃棄・改竄や虚偽答弁を強い、メディアには「公平性」の名のもとに政権批判を封じて、「臭いものに蓋」をする」(5-6頁)。「この政権からは強烈な腐臭が漂っているのだが、あまりにも多くの人たちが嗅覚を麻痺させられている。かくして腐った政権はいつまでも続く」(6頁)と。

前川さんは、その知りえた限りで権力の腐敗の実態を知らしめようとした。時務への応答の好例です。根拠なき喧伝とは対照的。安倍政治を「官邸1強体制と官僚の下僕化・私物化」(97頁)と断ずる。国政私物化の一例として「動かぬ証拠となる文書が存在する」(17頁)加計学園問題を上げる。また、伊藤詩織さんに対する事件を国政の私物化の例として挙げる。卓見だと思います。

最後は市民が賢明な主権者になり続けること。子どもも含めて。自由な個人でなければ、それは不可能である。思考停止・判断停止・事大主義に傾く個人では実現不可能な次元の営み。今回判明した政権与党の腐敗の事実は、嗅覚を麻痺させられた有権者が生み出した愚かな政治の悪行である。

検事長の定年延長問題、例の黒川さんの賭麻雀の件は、「賭麻雀報道から辞職までの経緯が、黒川氏の自作自演の自爆だったのではないか」(133頁)という。当人を知る者ゆえの想像力。絶対断り切れない状況を自分で創り出す？

名塚：なぜ、そこまでして？

徳本：前川さんは、それは不明だと。

卒業生：あっけない結末でした。誰が見てもアウト。でも、そういうこともあり得るでしょうね。笛美さんのTwitterデモの力も大きい。400万超のツイートでしたから。

徳本：政治は動かせるという見本。希望の光です。拍手。その一方、最期は残念でした。7年8カ月。歴代最長期政権であった分、歴史法廷の被告人として自己直視のための自叙伝、あるいは仲間内ではない、「こんな人たち」からの疑義への誠実な応答を記録に残すべき責任があつたのに。一連の疑惑への説明責任も果たしていない。

名塚：自叙伝を書く気持ちはあつたかどうか。社会としては客観的な評価を時間をかけて行うべきでしょうが。

徳本：本人の自己認識が肝心なのに。結果的にその大事な作業をしないままの最期。歴史にとってもマイナス。残念です。公文書を残さない、改ざん、廃棄ではどこまで真つ当な自叙伝となつたかは疑問ですが。後味の悪さです。逆に自己正当化や美化は歴史の女神から逆の評価を招くでしょうが。

卒業生：自己評価は難しいとはいえ、自分を偽りなく綴るのは大事なことです。名塚さんのように自分史を書く。誠実な自己直視。みんながやるべき大事な取り組みだと思えます。私も自覚して。

徳本：同感です。

名塚：あの後のことも書き続けることが必要かどうか。昨年、あそこまで書いてよかったと思う。健康状態も変化していますし。

徳本：健康寿命を維持し、その後のことは『文教教育』の近況報告絡みで。

卒業生：私からもお願いします。この座談会、さらに続きますね。名塚節を期待しています。

名塚：(苦笑い)

徳本：いざとなったら、電話でのやり取りを増やして。お互い耳も遠くりにけり、ですが。

12. 子どもへの思い

卒業生：学校の一斉休校の指示。現場は大変でした。混乱の中での対応の数々。

名塚：検証は十分なされているとも思えない。

徳本：事業所と違って補償の必要はなし。選挙権もなし。不満であっても選挙に影響はない。そもそも科学的根拠もなく、担当部局の権限を越えての指示。

卒業生：よかったと思っておられるのか。子どもにとっては取り返しのつかないこととなったのに。家族にとっても。総合的な検証はありませんよね。

名塚：「アベノマスク」の不評は確定事項でしょう。岸田内閣で在庫処理をしました。

徳本：場当り的で賢明さを欠いた税金の使い方。負の遺産は早く対処する。基本形です。それ以外の負の遺産は隠し続ける。アジア諸国との戦争責任問題も同じこと。「最終的かつ不可逆的に解決済み」などと。

赦すのは被害者側が加害者側を心底赦す思いになってからのこと。加害者側がもう終わりだ、なんて。二重の加害。赦しには想像以上の時間がかかるということですけど。加害と被害と、両方を経験している分、より深い想像力、共感性が発揮されているのに。

卒業生：そうですね。現場では、けんかの形式的な仲直りはさせないようにしています。時間はかかっても、お互いが納得してこそ次の段階。けんかが関係を深めるきっかけになるのが理想的ですから。安易な仲直りは却ってマイナスです。形式的な仲直りで早くけりを付けたいと思っていたのがかつての姿。少しは進化しています。

名塚：大事なことです。

徳本：話が元に戻りますが、柳田邦男『この国の危機管理失敗の本質』（毎日新聞出版、2022年）では、新型コロナウイルス感染症拡大を科学的に予想する研究が発表され、ヨーロッパ諸国ではそれなりの対策を打った。危機管理の基本の第一原則、平素から危機に備える、だから。ところが、安倍内閣の7年は安保法制の閣議

決定、森友・加計・桜等、自己保身のために費やされた、と厳しく指摘しています。危機管理の基本原則はほかに上げていますが、第一原則だけでも全く不十分。

卒業生：学校現場でも日頃の避難訓練などで、危機管理対応を行っているのですが。授業でも強調された、「避難三原則」。試験にも出題されたほど。「想定に囚われない」「全力を尽くす」「率先避難者になる」。日頃の生活の基本です。

徳本：さすがです。これからは危機管理原則も共有しなければ。

名塚：原則に照らし合わせて批判していくことが必要ですから。これからもしつこく。

徳本：国民が賢明にならなければ、政治はよくなるはずはない、ということです。そのためにもしっかり本も読んで。名塚さんは、今なお、本を買い、読んでおられる。倣いたいです。年金暮らしの身、最近はもっぱら図書館利用。

名塚：線引き、書き込みなどのためです。必要経費ですから。他に贅沢はしていないので。あ、ビールは別ですが。

徳本：私は発泡酒ですよ（笑い）。

卒業生：本は私も買いますが、まとまった読む時間がなかなか取れない。仕事優先ですから。学生時代はその意味で贅沢な時間だったと痛感しています。それに仕事に直接役立つ本が優先して、幅広い教養の部分が疎かになりがちです。名塚さんは、現職時代もよく読んでおられたようですね。

名塚：退職後を楽しみにして下さい。75歳でしたが。時間はたっぷり。病院通いも増えはしますが。

徳本：私の現職時代は教材。図書費は莫大でした。今は図書館利用。返却期限もあり、本気で読むようになった。速度も2、3割増し。分かったつもりになっているのか。それだけ知識・経験が増えているからか。テレビは観ないし。必要箇所のコピーや書き写し。100冊分以上か。200頁本が2枚とか。新しい読み方です。分野別に袋に入れて。新聞の切り抜きとは違って、少しは頭に入っている感じです。

卒業生：そんなやり方もあるんですね。私も本は手元に持ちたい方です。

名塚：好きな本が手元にあるだけで幸せな気分になれる。読み返しもできますし。新しい発見も。孫も読むだろうし。子も。

徳本：私の場合は、子どもは見向きもしませんが。孫はどうでしょう。長生きの原動力になります。あ、メモやコピーではダメですね。

13. 成功体験が前向きにさせる

徳本：先に学習性無力感が話題になったので補足です。成功体験も見逃さない。さっきの検察庁法改正案反対の発信。これで安倍首相は断念。「# Me Too 運

動」「フラワーデモ」等々での意思表示も。内閣支持率も意識調査への回答とはいえ、意思表示です。支持率が下がれば少しは本気になる。

名塚：若者の政治参加意識が低いことも指摘されてきましたが、自分のこととして政治を考えることが大事です。

卒業生：子どもの頃からの成功体験の不足は社会参加意識が低くなる原因だと思っています。学校・学級で自分たちのことは自分たちで決めるという経験を保障することから始めたいと思って、これまでいろいろ言ったこともやってきています。まだまだ不十分ですけども。子どもの権利条約の「子どもの最善の利益」です。

徳本：決定打ですね。日本の「子どもの日」に絡めて、「世界子どもの日」を試験で出しましたね。

卒業生：11月20日。意識して続けます。その方が子どもが元気ですから。大人も。

名塚：さっきも出ましたね。課題は次の世代に先送りしないこと。大人の責任です。仕事現場でもそうです。指示されたことも実際にやるのは現場。成功体験がないと続かない。

徳本：民主党政権への政権交代も政治上大きな成功体験だったはず。多くの有権者にとっては、ですが。

名塚：そうですね。

徳本：安倍さんがそれを「悪夢のような」と喧伝し続けたのは、成功体験の否定を目論んだからでしょう。下野時代の自己評価？

残念ながら民主党政権は権力行使について経験不足。内部紛糾もあってお粗末でしたが、それも国家権力行使という最大の旨味を知らなさ過ぎたからではないかと。有権者が納得するような総括を。

名塚：いくつか本にはなっていますが、どれだけ読まれているのか。

徳本：私たち自身ももっと生活者として政治に向き合うことが必要ですね。生活者目線からすれば、政治の不備は日常生活のあらゆる場面で見えてくるはず。地べたを生きる人びとにはとっくに見えている。

卒業生：仕事だけではなく、幅広い視点から。退職後、家事参加が増えたことは前回も紹介されていましたが、さらに進化中ですか。

名塚：介護の部分も増え、その分、家事はさらに増えています。

卒業生：男性の介護も増えていますが一人で抱え込むと危険です。社会資源の活用を。私の両親も利用していました。介護体験の報告も後日。

徳本：その分、政治への向き合い方はもっと鋭くなった。私は天と時間を味方にしていきます。洗い物はすぐに。自然乾燥。洗濯も同様。発酵も。余裕ができたからですね。

卒業生：余裕がないと、結果的にたまる。まとめて片付け。この繰り返し。政治家はどうなのでしょう。ど

こまで家事・育児・介護といった生活人としての姿は。

徳本：私たちも「オッサン」？ 生活人というところまで話が弾んで。一番根本的な部分ですから当然ですね。家政学。家庭の経済学。

9月のお手紙。どうぞご自愛のほどを。

名塚：私の身体の方は一応、落ち着きましたが、年数回は大学病院で経過観察。今度は妻の方が。外見上の後遺症は見えませんが、内面は物忘れ、イライラとで争いすること多々。リハビリ送迎等で慌ただしい日々を過ごしています。

本も4冊。加藤陽子他『学問と政治』、半藤一利『日本人の宿題』、野村泰紀『なぜ宇宙は存在するのか』、本郷和人『日本史を疑え』。7月初めに買ったものの、まだ読めていない状況。グリーンカーテンの件は、先の通りです。

人生最終章、最後まで気の抜けない状態です。先生との応答もできないと思われ。文教教育学会も今年度を持って退会しようと思っています。

徳本：今の高齢者は固定的男女役割分業観に染まって生きてきたこともあって、介護は女性役割とみなされた分、実際に自分が夫からケアを受けるとなると、抵抗があるようです。実際、それまで元気で活動されていた分、なおさらなのでしょう。私の母親も元気でいた分、一時は不安定でした。お大事になさって下さい。

名塚：手紙でも書いた通り、岸田政権、国葬などと、とんでもない話。物価高、賃金上がらず、75歳以上後期高齢者保険料2万円アップの話し等、国葬に税金を使うな、が私の心境です。

徳本：軍事費増のため増税は目論んでいるはず。岸田政権以前の政権が酷かった分、期待感があったとはいえ、全権委任だと思っゾボ。

別件ですが、昨年11月時点の「自分史」へのご家族の感想、奥様のそれは象徴的でした。

名塚：書いた通り、当初は反対していた。子どもや孫に悪い影響を与える、周囲の目を気にする、見栄、などから。それでも、2年ほど前からやっている「天声人語」の書き写し中、2021年9月8日付、色川大吉さんの自分史についての記述を写してから、考えが変わった感じ。

「後悔や間違いを、こと時代状況に応じて書いてほしい」。歴史の本質を問い続けた学者の遺言。

徳本：色川さんが勧めていることを夫がしている、それは尊敬ですよ。

名塚：長男は「長文だったね、父さんの小さい時は貧乏だったんだね」。孫の一人は「中学校の時、吉田松陰らの植民地政策を学習した。今また、高専で東大出の先生からも習った。大変凄いことを書いている」。

徳本：生原稿の迫力は格別です。私たちの応答と絡めて、ご家族の皆さんとも語り合ってみたい。本音の証

言ですから響きます。時務への応答も絡めて。

卒業生：子どももきれいごとには本気にならない、むしろ教員の失敗に共感する、私も経験があります。けど、失敗と共に学ぶのが子どもですからね。

名塚：自慢や自虐ではダメですね。自分史で心がけてきたことでした。自己直視なのですね。

徳本：言い訳や責任転嫁的なことも一切なし。襟を正されるという感覚も、です。

卒業生：だから読みやすかったのだと思います。続きを期待しています。

名塚：ありがとうございます。

14. お詫びと訂正

徳本：前稿54頁右【名塚：(前略)先日一部は一部の教科書に「従軍慰安婦」を「慰安婦」に、「強制連行労働者」を「労働者」に、言葉の言い換えを認めた。／徳本：閣議決定されましたから(2021年4月)。】後段、「連行」ではなく、「徴用」を用いることが適切である、と訂正。「労働者」は「徴用」の誤記。徳本の理解・確認不足が原因でした。名塚さんをはじめ、読者にはお詫びと訂正をします(2022.9.30)。

2. その後の補足など

時務への応答は、時々刻々変化する部分と、底流にある部分との両方を意識することが求められる。座談会後も応答すべきことは山積。以下は補遺。

資料2. 座談会後の補足

1. 身体感覚

「やっている感」に惑わされて、結果的に安倍政治を支持した人びと。他方、腐敗臭を嗅ぎ取って批判的に応答した人びと。表層部分での応答と、深層を含めた応答との違いか。深層は真相でもある。危機の時代には批判精神は必須である。「坑道のカナリヤ」の役割はカナリヤだけに任せてすむ話ではない。デマが拡散され、陰謀論が流布する時代にあつて、最後は一人ひとりに固有の身体感覚を研ぎ澄ますしかない。

AIの進化は想像以上とはいえ、80億人の人類一人ひとりに固有な身体はAIには獲得できるのだろうか。小さな小宇宙である身体は大きな宇宙に依存しながら、参加している。指紋、声紋等、すべて固有であることの意味を自覚しながら身体的な応答を続けたい。応答はこれからも続く。

土屋敦『戦争孤児』を生きる—ライフストーリー／語りの歴史社会学(青弓社、2021年)は、当事者10人の語りの記録。自らの体験を語り得るには、相応の社会的条件が必要である。「沈黙の50年」「沈黙の70年」を強いてきた社会の側への問いかけでもある。名塚「自分史」と重なる部分もあつて圧巻。「戦争孤児」を生んだ戦争を引き起こした政治への厳しい

対峙は必然である。名塚会員も然り。歴史学習を通してどこまで当事者の次元に至っているか。厳しい自己点検が必要となる。

2. 「核のボタン」のこと

首相辞任後も「核の共有」発言を活発にしてきた安倍元首相。歴史的理解を含めた被爆・被曝の実相をどこまで理解していたのか。人類最初の戦争被爆を体験し、現在も進行形。東電福島原発過酷事故による加害と被害の両方を経験。これまた現在進行形。それでいて核兵器禁止条約への批准、オブザーバー参加もない。核廃絶の方向への発想はありや。

米軍岩国基地訪問時のオバマ大統領のヒロシマ訪問。慰霊碑の前に「核のボタン」の存在を印象付けられたことは記憶に新しい。これが現実。核のボタンを握っている人たちに人類の命運が握られているという残酷な現実を思い起こさせた。プーチン大統領も同様。

ウィリアム・ベリー、トム・コリーナ、田井中雅人訳、吉田文彦監修・解題『核のボタン—新たな核開発競争とトルーマンからトランプまでの大統領権力—』(朝日新聞出版、2020年)は、核危機回避のための10大勧告を示す(271-285頁)。著者が最重要だとするのは、勧告10「明確な態度を持った大統領を選べ」。これに尽きるという。独裁的長期政権は他の8つの勧告を無視するだろう。最後は市民の自覚だ、と。勧告9「市民運動のテーマに核兵器を取り込め」。反核・核廃絶の声は広がりつつある。それぞれの国で勧告10を実現することである。

300頁超えの本書の中で日本への言及もある。「特に、日本の首相、安倍晋三は先制不使用への反対を個人的にオバマに伝えた(2016年8月15日付けワシントン・ポスト紙で)報じられた」(138頁)。「日本は核軍縮の原則そのものに反対しているのである」(146頁)。核攻撃にさらされた唯一の国、「唯一の戦争被爆国」でありながらの安倍発言。度し難い。ヒバクシャや市民が担ってきた核廃絶の声を日本政府が発する時期なのに。「橋渡し」の役割も具体的は何をやっているのか見えてこない。

3. 検証に耐える政策

権力は独占すると腐敗する。政治や経済、教育、文化等、全てが劣化する。その一端は話題になった通り。学者やジャーナリトたちの仕事はそれらを歴史的に総合的に検証することである。川上高志『検証 政治改革—なぜ劣化を招いたのか』(岩波新書、2022年)は、首相官邸への権力集中の結果の「一強」政治と、そこからの驕り、国会軽視、忖度官僚の出現、メディアの萎縮等を巡っての検証。現代政治の裏面を映し出す。安倍首相の「小刻みな衆院解散と総選挙」戦略が奏功したことを検証した。各章扉の写真がその時々を語る。

毎日放送の齊加尚代による映画『教育と愛国』

(2021年)と同名の書籍『教育と愛国』(岩波書店、2019年)は、安倍元首相の通知表のようなもの。下野していた時に大阪維新の会松井代表と政治家の教育への関与を是とする熱弁を振った。「(教育に)政治家がタッチしてはいけないのかと言えば、そんなことはないですよ。当たり前じゃないですか」(39頁)。2012年2月発言。発言は後に修正されたが、関係者に教育への誤った介入との意識があったからだろうと齊加。

1947年教育基本法が強調していた「不当な支配」の禁止を、2006年教育基本法改正で法律に則ることと規定した。映画『教育と愛国』が示す実態は2006年改正が果たした役割がいかに大きかったかを示す。

愛国心を煽る人たちの子どもへの思いとは何か。操作対象としての子ども、畏れるべき相手としての子ども。ベクトルは真逆。後者ならきれいごとだけではなく、負の部分も含めてありのままを曝け出すのが真正の愛。負の部分を経らずして、後日、負の部分を知った時の落胆は大きい。負にどう向き合ったか。乗り越えようとしたか。それが贈り物になる。統一教会との癒着はその悪しき一例。

「尊い命を落とされた英霊に尊崇の念を」というのが安倍元首相の決まり文句。死者への尊崇の念は嘘やごまかしを拒否する。これまた「英霊」にどう説明するのだろうか。黄泉の国でいかに。

嘘を言う自分と本当の自分と区別はついていたのか。嘘が常態化してそれが自分となり続けていたのか。国会審議中の品のない野次、「早く質問しろよ」「ニッキョウソ、ニッキョウソ」は典型。汚い戦術として歴史に刻印された。主権者の主権者意識の度合いが問われる。

子どもの手本からは程遠い。子どもへの敬意があればありえない。与野党問わず、議員は有権者の委託を受けて当選した人びと。未来の有権者である子どもも当然含まれる。その自覚はどこまであったのか。辟易していた。次はどんな言葉・文化の破壊を目論むのかと。

日本での虚偽発言等は当然、外国の首脳も知っていたはず。風評被害。足元を見られていた。翻弄された格好。日本国民の損失。これまで喧伝してきた愛国心の化けの皮は剥げた。経済援助とセットの首脳外交の場合は相手国は悪くは言わない。外交の常識。原資は税金。

添田孝史『東電原発事故10年で明らかになったこと』(平凡社新書、2021年)も検証本。「これは事故というより、東電という一企業が放射性物質をばらまいた公害「事件」なのだろう」(5頁)と、著者の立ち位置は明快である。水俣病がチツソという一企業が有機水銀を垂れ流した公害「事件」であるように。表記の問題は本質に絡む。仙台高裁は国の責任を認めた初の高裁判決となった(2020年9月30日)。歴史的判決は学者やジャーナリトたちの仕事の蓄積や原告と彼ら

を支える市民たちの熱量等が生む。嵩む後始末の費用はどこまで国民に共有されているのか。

4. 世界の中の日本

日本の現在の閉塞感の世界の中の日本という視点を欠いた結果ではないか。ジェンダーギャップ指数をはじめ、国際的な地位が相対的に低下し続ける中で、自己直視を自己防衛的に避けている。

その閉塞社会に風穴を開けている一人がブレイデイみかこ。『THIS IS JAPAN - 英国保育士が見た日本一』(新潮文庫、2020年、新潮社、2018年)。例えば「普通」観。結婚や子育てに対する捉え方の違いとして、日本の若者は普通の人間にはできないぜいたくなことと捉えるのに対し、スペインの若者はそれを普通のこととして、それができる世の中にしろと憤る。「時流に合わせて変化する『普通』の基準と、時代や政治情勢で変わったりしない普通の『普通』」(81頁)。日本の保育園の在り方は、とりわけ保育士の配置基準の低さの点で「決断力や想像力のある人間を育てる教育と逆行しているように見えた」と批判する(111頁)。義務教育諸学校の定員も35人学級がようやく開始。子育てや教育に金を使わない国は減じる。

市民の立ち位置の問題として右か左か。どこにウイングを置くか。辞書的には明快。ブリッティッシュ英語の説明。「レフト」とは「富と力は社会のすべての部分で分配されるべきだと信じる政治的な集団」(70頁)。有権者はこの基本を忘れると自滅する。この定義に賛同しない有権者はどれほどいるだろう。選挙における野党共闘を「野合」と揶揄する自公等の戦略にまんまとはまる。萎縮させることで戦略が奏功する。一強支配が続く。隠れた負・罪はさらに隠蔽される。負の循環である。前回は強調した、歴史を生きる者の責任を自覚したい。【人は誰しも、誕生と共に有無を言わずその国の歴史的責任性を背負わされる。誕生以前の事柄についての直接的な責任はないが、以後のことについては年齢相応分の責任がある。歴史を学ぶことを通して同時代に展開されることについての責任、時務への応答を全うすることが求められる。その国が持つ国民性を理解した上でその後の歴史的展開に対しての責任です。】

5. 若者との会話

斎藤環・福山哲郎『フェイクの時代に隠されていること』(太田出版、2018年)。ある女子高で政治家を招いて高校生と討論する。きれいごとに高校生は反応しない。生身の身体同士の丁々発止のやり取りが肝心だという見本。オープンダイアログの世界。学校では基本中の基本。

本音のやり取りでないとフェイクを暴く^{おぼ}学びは成り立たない。しかも、自分事としての発言でないと届かない。言葉の問題ではなく、生き方の問題である。

6. 小説家の想像力

下関市出身の作家田中慎弥は『宰相A』(新潮社、

2015年、新潮文庫2017年)で、文芸を巡るディストピア小説を描いた。後景には安倍晋三をモデルにした宰相。グロテスクな人物として造形されている。小説家の想像力の逞しさである。空恐ろしいほどである。本質をわずかな出会いの中で見抜く。時代のはるか先を読む力を文芸は持つ。

安倍・菅政治は文芸に酷く冷淡であったが、本質を見透かされることへの恐怖が根底にあったのだろうか。田中の観察力の具体例が『実験』(新潮社、2010年、新潮文庫2013年)にある。個人的な付き合いの中で安倍元首相を好意的に捉えているメディア関係者には、田中のような人間観察力はどうか映っているのか。青木理『安倍三代』(朝日文庫、2018年、朝日新聞出版、2016年)には「凡庸ないい子」として以外の素顔がない。青木は、右派に担がれたプリンスだった、と言う。

7. 纏れた糸を解き続ける

乱麻を断つような怪刀は時には必要とはいえ、纏れた糸を解き続ける、そんな根気を培う経験は必要ではないか。単純な分かりやすさは畏である。真相は複雑に絡む糸を解き続けなければ解明できない。時は金なりの人生観だと安い物は打つ遣ることになる。弱い者切り捨ての政治の根幹もこんなところに原因があるのだろうか。生活人としての経験の質が絡むのか。生活人としての政治家の側面を取材するのは大事になる。田中角栄のように、苦労人の政治は優しくかった。

出張の際、計画案は複数。熟慮後、最善案を選ぶ。その後、変更もあり。立案段階で複数案を考えたことが生きてくる。これが日常。他国への侵略という、普遍性から外れた国家戦略を立て、実行する以上、熟議熟慮は必須のはず。それは独裁者の下では機能しない。

8. 大村はまとの共通項

「怠らず勤めだにすれば、それなりの功はあるものなり」(本居宣長)。40年間教員をやると、結果的に尊敬する人の生き方と共通するものに近づく、という嬉しい発見も。高みを目指し、愚直に歩み続ければ自ずと到達する。愚直に生きることの成果。

優れた国語教師大村はま。残念ながら出会ったことはなかった。機会を作らなかった。愛弟子刈谷夏子『評伝 大村はま—ことばを育て 人を育て』(小学館、2010年)には共通項がいくつか。

①授業代行。私も前職では上司の休講はすべて代講した。担当授業だけではならず、授業の材料には事欠かず。急な当日休講の知らせであっても、資料を用意して教室へ赴いた。「サプライズ」は一回きり。学生も代講が当然という意識になっていたのは幸いだった。「意識高い系」の学生。当時、専門職就職率100%はその帰結。給料は変わらず。当該上司からの物的お礼もなし。それゆえ純粹に代講できた。大村のいう、「ひたすら」を学生と共有していたのだろう。

②「筆記帖の提出」(227頁)。大村と違って、私の方は100人、200人の規模の授業。ノート提出は私の授業の基本形。

③授業開始時の挨拶風景。転校生であった刈谷が転入2日目のこととして語る。大村63歳。「日直がかけ声をかけての「起立、礼、着席」というのがなく、ごく普通の声で先生が「おはようございます」と言い、級友がばらばらと「おはようございます」と答えたのが、授業の始まりだったことに、小さな驚きを感じた。あつという間に、クラスが落ち着いた様子になった」(434頁)。刈谷の学びの身体が真正であるがゆえに本質に気づく。操作される身体ではなく、自然に学びの身体に自らがなっていくことを私も大事にした。大村もそうだったんだと、親近感。

戦争責任絡みで戦後の授業への取り組みがさらに徹底したことは、敗戦体験のない私以上の覚悟だったはず。実践への発展については詳らかではないが。到達するところは同じということか。大村はま『教室をいきいきと1・2』(ちくま学芸文庫、1995年)は模擬授業の実習事前課題に関連して紹介した。指導技術本をはるかに越える作品として推薦した。概要は『文教教育』に掲載済み。

【補足：余談。本学着任後、しばらくは授業中、学生がトイレに行ってきたりいいか、と私に許可を求めることが幾度かあった。大学入学前の学びの惰性の習性とはいえ、大事な事項ゆえ、授業の途中で思いを示した。刑務所ではない、「出入り自由」「許可不要」。そもそも生理現象はその人の領分。他者が立ち入ることではない、と。他の教員はどうだったのだろう。話題にしてみればよかった、と今思う。

関連事項。先輩教員の中には授業開始時刻と共に入室禁止という手を取る方も。事情あらば最前列に座ることはできたとはいえ、学びの本質からずれている。私は見習わなかった。遅刻の理由は多様なはず。遅刻しないで参加したいと思わせる授業を共に作ろう、授業参加以上に価値があるものがあれば、その旨報告書を書いて、提出されたい、などとも。青かった。学びの時空づくりに参加する。参加民主主義の時空にもなることを意識した。

NHKスペシャル取材班『高校生ワーキングプア—「見えない貧困」の真実—』(新潮文庫、2020年、新潮社、2018年)は、その実態を可視化せんとする。アルバイトやヤングケアラー等の若者も少なくない。それゆえ、学びの時空はいつでも開かれたものでありたい。閉ざすことは二重の負荷を背負わせる。そもそも定刻出席ならそれだけの学びが得られるのだから。それでよし。遅刻者がいると授業の雰囲気乱れる？授業はライブ。ライブ感を大事にすればよい話。演奏会での途中入場とは別。】

【補註：大村に私淑した講師による講演への岡利道会員の感想(『広島文教教育』第35巻、2020年所収)。

「紙幅の都合で」多くは語られていないが、大村を共通項とする分、著者たちの大村実践への応答を期待したい。言葉を大事にしてきた大村は安倍話法や「ご飯論法」をどう評価しただろうか。大村を尊敬する人びとはいかに。日本語教育学の担当者ではない私は、言葉を媒介にするゆえに批判を繰り返してきた。優れた先人を前に自分の身体がいかなる応答をするか。周りの目ではない。自分の身体への応答である。自分自身への誠実さが現れる。それを綴る。右田のように。

余談ついでに。10人の学生による共同研究、卒論生の作品と知って驚いた。研究助成を受けた以上、一定以上の研究でありたい。卒業後の実践と絡めた補足版を期待する。指導教員の自覚に俟ちたい。】

9. 表現者

中村哲医師の3回忌の12月4日、AIの進化に関する講演を聞いた(概要は川添愛『ヒトの言葉 機械の言葉—人工知能と話す』以前の言語学 角川新書、2020年)。質問時間が無いなか一人が質問。応答が短時間だったこともあって、私も質問。件の、富岳への問題。併せて人類の負の遺産をすべて学習したAIに人類が生き残る戦略を語らせ、人類は虚心坦懐に聴き、実行に移すという会議、コンGRESは成り立たないか、とも。ちょうど講演と共通企画として映画『コンGRES 未来学会議』上映期間中であった。一瞬、想定外といった感じであった。言葉に関する質問ではなかったためだが。それでも真摯に応答された。難しい質問だが、どのような視点で、どのようなデータを入力するかが問題、云々。尾中本の存在には言及されなかったため、念のため私から紹介した。快著の共有のためである。

会の後にお礼を兼ねて挨拶。先を行く者・先に往く者の仕事は少しでもましな社会を残すこと。人間の知恵が追い付かないのなら、深層学習するAIの知恵も借りたいとの思いから云々。

私の中には前日の映画『牛久』(トーマス・アッシュ監督、2021年)があった。上映会とトーク。時務への誠実な応答を続ける監督に感化された証だった。疑問、知りたいことを参加者と共有する、一つの社会活動であろう。監督効果か、私の動きが活発になった。これら作業も時務への応答の一環。

大田、大村や中村の薫陶を得たAIが存在していれば、究極の理想社会への道筋を示すだろう。希望は数多の生身の人間が象徴としての彼らの薫陶を得て現場を生き続けていること。80億人の綱引きである。「私」はどの方向でどれだけの力を出しているのか。

安倍首相(当時)の一斉休校措置に対して上間陽子は触れる。「私たちがいま奪われているのはなんだろうと考える。子どもの日々を知らず、家族の生活を知らず、教師の仕事を知らない誰かの決定によって、ひととひととが重ねる時間が奪われる。四月からの一年間、関係を編み続けた子どもと教師がお互いのことを

慈しみあう、そういう三月が奪われる。いままでの苦労のすべてが果報に変わるこの時期に、子どものいない学校に教師は通う」(152頁)。「そしてまた、同じことを考える。ひととひととが紡ぐ営みを知らない人によって奪われ続けている私たちの時間と、子どものいない学校に通う若い教師のことを考える」(155頁)。

現場を知悉していない権力者の決定がいかに的外れか。地べたを共に生きる者が持つ強さ・勁さ。現場とは自前の言葉を自らの身体で語るというところ。同業者とはいえ、上間ほどの感性が私にはあるだろうか。長く引用したのはわが身の至らなさのお詫び。

表現者は時務への応答なくしては存在意義を失う。単なる興味。私も同様。批評家も同様である。この観点に立つ映画界での定例の作業がある(「映画は社会の何を映すのか」『キネマ旬報』2022年8月上旬号、No1900)。上半期12作品が対象。観る側はその座談会に読者として参加できる。基本は一人ひとりの時務への応答が先立つ。作品への応答に参加する上での資格である。各自の皮膚感覚が問われる。多くの場合は作品からの学びがはるかに大きい。

10. 皮膚感覚

高村薫『作家は時代の神経である—コロナ禍のクロニクル2020→2021』(毎日新聞出版、2021年)は、週刊誌への週一回の時評の再録。「ジャーナリストではない—作家にあるのは皮膚感覚だけである」という。「日々原稿を書き、新聞を読み、自分の足でスーパーに買い物に行き、家事全般をこなし、近所の乗馬クラブで馬の世話をし、それなりに独楽ネズミのような規則正しい暮らしが、私の皮膚感覚を作っている」(281頁)。

皮膚感覚とは存在証明である。社会環境に屹立するから個として存在する。流され、飲み込まれると存在を失う。各自がその足元で生きることが皮膚感覚を作る。高村の悲痛とも思える時評はそのような時代を作ってきた一人としての自問でもあろう。「世界は今、感染拡大に耐えながら、人間の知性と良識と希望を総動員してコロナ後の新生を模索しているのだが、私たち日本人は何よりもまず、公共のための言葉が衰弱したこの地平から脱け出すことが、初めの一步になる。2020.6.7.」(69頁)。彼我の絶望的な差。その差は天災ではない。有権者、国民が結果として創り出してきたものである。天に唾した結果である。「かの無謀な戦争しかり。地震国で原発を動かす無定見しかり。1,000兆円もの国債発行残高しかり。最後に泣きを見ても、政治から民間までことごとく根拠のない安全神話や楽観にすぎるのは、日本人の国民性などではない。個々の責任を問わない社会の甘さが非効率のはびこる独善を生み、独善が無責任な楽観を生むのである。2021.4.4」(249頁)。

引用が長くなった。具体的な実態を踏まえての時評である。実態は新聞等で報道されている。読み手も同

じ材料を得ている。高村の時評を読むと、私の時評の浅薄さを痛感する。それでも浅薄な自己を自覚することが民主主義社会形成の砂礫の一つとなる。飛礫にもなる。怯みは禁物である。

11. 地べたから

反貧困社会活動家の雨宮処凛『コロナ禍、貧困の記録—2020年、この国の底が抜けた』（かもがわ出版、2021年）は、2020年・秋の章に言う。「7年8カ月続いた安倍政権が、終わった。（中略）思えば、長い長い時間だった。諦めや無力感を植え付けられるような、反対意見を言えば、「晒し者」にされかねないような、常にそんな緊張感が頭の片隅にあるような年月だった。ということをや、終わって初めて、意識した。自分はどれほど萎縮していたのか、8月28日、辞任の会見が終わってしばらくして、改めて感じた。」（123頁）。「声を上げることによって、見知らぬ人たちからネット上で凄まじい攻撃も受けた。（中略）この7年8ヶ月で破壊されたものを修復していくのは、並大抵の作業ではないだろう。（中略）だけど、ここから始めていくしかないのだ。（後略）」（128頁）。

実際に走り回っていた人びとは私以上の消耗と闘いながらの年月であった。自覚的な人びとだけに抗いを任せていることは許されない。それぞれが自分の力量に応じて時務への応答を続ける。動いた分相応の成果はある。その一端は紹介した通り。

遠音やかそけき声、いわんや声なき声ではない、然るべき声であり、文字化された声である。応答は自然に生まれる。身体を潜った、内面が滲み出てくる声への呼応や応答は応答する側にも励ましが生まれる。他方、排除や虚勢を糊塗する声は呪いの声であり、分断・選別を生む。応答する側にも徒労・消耗を残すのみ。排除や虚勢に気づかない当事者が自らの隠れた本音に向き合うための関わりは大事にされてよいとはいえ、相当な時間と労力とを要するであろう。この件について考える材料は圧倒的に不足している。他日を記したい。

おわりに

時務への応答は同時代を生きる者の責務である。座視すれば破壊行為の帮助、共犯となる。後代、優れた歴史感覚のある世代からは徹底的に断罪されよう。批判は自らの課題とする限りにおいて意味がある。上の代の戦争責任等を問いかけていた青年時代の私自身へのブーメランである。批判精神を多少なりとも培った成果が現在である。3歳で国家の犯罪性を刻まれた名塚会員の比ではないが、本年も尊敬する先達を喪った。合掌。（2022.12.10）

付記：今回、いろいろと話し過ぎた。なお、単著で被害者支援活動に関する覚書を記した。併せて御批正賜りたい。被害者の背後の加害者、加害者を生む社会の不平等・差別・不条理の構造。座談会で言及したことは共通である。

退職後も、詩の朗読会、朗読の会などに参加。3分間、5分間の制限時間内で最大限の発信を意識。4月は大村はま最晩年の詩「優劣のかなたに」。11月は、スヴェトラナ・アレクシェーヴィッチ、松本妙子訳『チェルノヴィリの祈り』（岩波現代文庫、）の冒頭の証言、「孤独な人間の声」リュドミーラ・イグナチェンコ 消防士、故ワシーリイ・イグナチェンコの妻。文庫本で28頁分。16枚の複写を新聞紙に貼り付けて28頁分の分量を視覚化しながら。私の朗読が響けば、読み手が増える。「孤独な人間の声」に応答する。思いの一端は受け止めた、と伝えたい。応答する身体。90分という授業時間を保障されていた時代がいかに恵まれていたことか。

私事だが、父親を亡くし、貧乏生活の中、学生生活を続ける際に、大学の授業料免除制度の恩恵を受けることができた。国にとっては少額。私には大金。支えられているという感覚は社会への恩返しを決意させる原動力となった。こんな金を惜しんだらこの国は後悔する、と自分を励ましたことも。自尊心を奮い起こすため。大学院時代は2年間、成績順選考のため奨学金対象から外れる。納得はしたが、バイトで大変だった。奨学生の友人がラーメンを1箱くれたのは有り難かった。山上さんにはそのような支えはどこまであったのか。

書くことは人生の先達への礼儀・恩義ゆえの行動。共同作業の有難さ。馬力の原因。今回、関連本を読んだ。深層部分を踏まえた著作も多々。発行年を確認する。3.11以来の曲。2022年も新たに加わった。太鼓持ち本は今後、いかに。事実に基づいて真実を追求する。この姿勢は大前提。中村哲医師のように人類愛・人権に即した現場を生きる者の発信にアンテナを張る。有限な存在。名塚自分史の続編は、私の自分史にも繋がる。

時代を前に進めた立役者の一人、笛美『ぜんぶ運命だったんかい—おじさん社会と女子の一生—』（亜紀書房、2021年）。快著。（2022.11.28）

補記：教育学とは警世の学であり、希望の学である。保育学も含む。乳幼児をはじめ、子どもに最も近いところでの営みを業とする者は彼らの上に起きている異常を最初に感受する。専門知を元に社会へ改善を求めて警告する。同時に、自らの懸念で賢明な実践を持って異常に対処する。改善は希望である。

本年もこども園の送迎バス園児置き去り死事件が起きた。氷山の一角である。最低限の手を尽くせば起きない事案。人間は誤る。それを最小限にするための他

の補填策が講じられる。だが、最低限の設置基準には批判の目が届かない。コロナ禍、多忙化する業務が従来の業務の忙しさに輪をかけている現実があるとすれば、関係者への批難だけでは再発防止にはならない。物的な対応も一助になるだろうが、それだけで一件落着にはならない。

保育の質を高めるための最善策・抜本策は保育士増員である。設置基準改定である。給料の大幅増である。多くの男性政治家は家事・育児等の経験不足故にこのことが分からない。保育現場からの悲痛な声にも無関心である。同様の事件は、政治の貧困、不作為が招いた事案でもある。一見、子どもの味方のような姿勢は見せる。それが票を当て込んだ演技であっても。おまごかしではないことの証明は子どもの最善の利益実現のための最善・最適な政策の立案と実行。いずれも実際の政策に現れる。選挙権のない子どもは後回し。統一教会との癒着問題ではつきりしたこと。政治家はおお筋に敏感。票のためなら毒さえ厭わない。

座談会では言及しなかったが、被害者支援活動に関わる身。被害者遺族の安倍昭恵さんへの支援は万全だろうか。「私や妻が関わっていたとしたら、総理大臣も議員も辞める」云々。例の啖呵である。これが契機となって付度官僚による文書改竄が行われ、公僕赤木敏夫さんを自死させた。遺族雅子さんの一連の裁判。「認諾」で二度目の死を強制した。

事件のその後の展開を前に、胸中いかばかりか。お悔やみ申し上げる。雅子さんへは引き続きの支援を。

後ろ盾を失った面々は胸中穏やかではないだろう。お仲間の政治家、付度官僚等々。社会や歴史からの正当な批判の前に耐えられるだろうか。一般論で言えば悪事を働くとな身の安全はない。誠実な日々が安心・安全な人生を生む。悪事・暴力と安心・安全は両立しない。

「特別な教科 道徳科」設置の主導者が反道徳の悪しき典型例になったということか。人生に錬金術、魔法の薬はない。公、国家のためという優先目標は、いつ、どのようにして政治家の自己保身の隠れ蓑になってしまうのだろうか。言葉に関して言えば、早口で多弁を弄したのは、誠無き弁であることを自覚していたからなのだろうか。新書版で記せば1行で済む話を8行に亘って長々と。冗長も隠れ蓑か。7年8ヶ月。長さではなく質で評価される、というのが、長期間負の遺産を積み重ねてきた。歴史叙述はどう描くのだろうか。

北朝鮮からのミサイルと思われる飛行体。5年ぶりか、「Jアラート」が発された。どう対処するのか。実際に狙われたら成す術無し。原発や核のゴミ貯蔵地が攻撃目標になれば、この国は核汚染に侵され、居住不能。これがリアルな現状認識。徹底的な外交努力しかない。「核の脅威から人類を守るのは核ではないし、NPTでもない。核をもたないことが唯一の解だとい

う核禁条約の明確な論理に同意しない日本人は少数のはずだ。核禁条約は理想論ではなく、もっともラディカルな現実論なのである」と、高村薫は言う（『週刊サンデー毎日』2022.9.4号）。もっともラディカルな現実論に立たず、それを実現不能な理想論として退けようとする傾きは、歴史的真相を学んでいない人びとの空論であろう。自他を信頼できない人びとの代名詞だろうか。（2022.12.5）

追記：原稿書きの最中に辛いニュース。自他への信頼を体感すべき幼児たちに、3人の保育士による暴行事件が発覚した。保育の質を高めるために日夜、懸命で賢明な実践を重ねている現場人を前に言葉が出ない。それでも、3人の個人的な資質・能力の問題で幕引きにはしてはならない。良質な職場環境は子どもにとっての良質な生存・発達・学習環境なのだから。子どもの権利条約が謳う「最善の利益」を日常のあらゆる時空で実現することから始めたい。

1947年12月12日児童福祉法制定。児童育成の責任（第2条）「全て国民は」、「児童の保護者は」、「国や地方公共団体は、保護者と共に」と謳う。年月の積み重ねが質の高まりの証となるような国民総がかりの取り組みの実質が問われる。被害に遭った子どもたちにそれぞれの実情に即した「最善の利益」を保障したい。

渡邊正裕『10年後に食える仕事 食えない仕事』（東洋経済新報社、2020年）が分類する「職人プレミアム」の中に保育士。正当な報酬は当然のはず。他方、「AI・ブロックチェーン失業」に「学校教員（マス授業）」を、「デジタル・ケンタウロス」に「大学教授・教育者」を位置付ける（188頁）。「学校教育（マス授業）」については、著者の対象分析の狭さと構造的把握不足が導く皮層的な結論ではないか。本誌読者の見解はいかに。（2022.12.10）

付則資料 女性の政治参画に関する講演（2021.11.6）への応答メモ（2021.11.11）

【講演者は久保田后子。山口県宇部市長を歴任。県内初の女性市長。退任後、社会活動を展開中。1年前の感想だが、賞味期限切れでもないと思う。本文と重なる部分があるのは金太郎飴。小見出しは私。掲載に際して、重複を避け、字句を正した（2022.9.27）】

0. 応答メモ 簡潔にして要を得た資料。印刷担当の労力軽減。現場への配慮。支援者が生まれる要因。当事者的な話題ゆえの迫力。これまた支援者が生まれる要因。聞き手として自然に応答モードとなる。以下はメモ。

1. 「他人事」意識 政治が「他人事」意識になっている。学校現場では課題解決学習は進んできたが、課題発見学習については途上。課題は自己以外のところから与えられる。これが基本形。積極的であっても課題は外からくる。取り組む姿勢においての主体

性であって、課題が与えられなければ、取り組まない子どもを生みかねない。学生は教員が教室に入っていない限りは、学びのモードには入らない。例外はあるが少数。大学入学以前の「生徒」を「学生」にするのが大学教員の仕事の一つ。

本来は、子どもと教員とがともに社会課題に立ち向かうといった学びが基本形。これが不十分であるが故。主体的で対話的な深い学びが導入されては来たが、政治や行政に関する分野に関わる主題は、課題解決学習としてもほとんど取り上げられない。社会的・政治的土壌として、家庭や学校では政治分野の話はなされにくい。地域でのそれはさらに少ない。雑談を通して相手の反応を見ながら小出しにする、これが私の現在。これが欧米との違い。政治は庶民が語ることでないという意識なのか。政治が日常的でない。政治の生活離れ、生活の政治離れ。

歴史的にみても、封建時代からの悪しき伝統か。大日本帝国時代はこの政治的無能者育成政策が徹底していた。選挙権付与とセットになった治安維持法（1925年）が象徴的。教育ならぬ、教化。総力戦の近代戦を総動員体制で支えた。結果は、未曾有の災禍としての無条件降伏。それゆえ、敗戦後制定の1947年教育基本法第8条「政治教育」は、戦前の反省に立った改革を目指した。例えば「政治的教養」の涵養が強調されるも、保守政権が「政治的中立」を学校教育に過度に求めた結果、今なお、ヨーロッパの主権者教育からは大きく遅れているのが現状。結果として現代においても主権者教育の視点は乏しい。

かつての「政治の季節」にあっては、18歳選挙権年齢問題は政策に上がらず。若者の保守化傾向を踏まえての導入という面もあったであろう。文科省作成の主権者教育ガイド本の選挙権獲得の歴史の叙述は平板すぎるほど。要するに「お上」にお任せ主義の風潮は根強く残っている。諸権利をどこまで自らの手で勝ち取ってきたかということと繋がっている。血と涙と命をもって、獲得のための取り組みをしてきた人々の歴史が十分には継承されていない。

政治家の「世襲制」については、質疑の通り。犬養木堂のような政治家（林新・堀川恵子『狼の義』）を同時代史として感じられないのは、国民にとっての不幸そのもの。とりわけ、ここ9年間の政治では、学習性無力感の「優等生」を多く生み出してきた。社会・人間としての底が抜けたかのようなあれこれ。それでも選挙は自公政権側の「無敗」。勝敗の観点を民主主義の成熟度におけば、別の結果となるのではないか。

結果的には多数派志向の傾向がある国民にとっては、選挙結果は次の「もう一つの在り方」へ更なる取り組みを決意させるよりも、多数派へのなびきを無意識の中に形成する。勝ち馬に乗る。積極的受動主義のさらなる進展。消極的受動主義よりも後退している。同じような選択基準で選択してきた結果が習性で

なったということか。

主体的選択ではないから、結果が負と出ても自分の責任ではないと言い逃れができる。誤った「自己責任」の風潮が生んだ悪しき結果の一つ。主権者にとっては「悪しき」そのもののはずだが。

今回の選挙で象徴的だったことの一つは、市民連合との約束としての、例えば「モリ・カケ・桜」の真相解明、学術会議の件、選択的夫婦別姓の件、等々がどこまで選択肢の上位にあったか。詳細な分析はされているのだろうが、私は未見。いわゆる「B層」の投票行動は今回、さらに加速されたのか。「経済」が今回も重視されたというのが大方の要因とその結果。

事実としては、9年間の経済政策で巨額の富は得られたのに、それらが大企業や富裕層へは分配され、国民の大多数、とりわけ困難を抱えている層には本来の再分配機能が働いていないが故の現状であるにもかかわらず、である。大企業や富裕層の関係者は、自らに有利になる政策決定を着々と行っている。合法的にであるから違法とはならない。この点是有権者がどこまで理解していたのだろうか。低所得者層をはじめ大多数派は、この事実が公表されてもさほど怒っているようには見えない。諦めか。いずれ自分もそのような恩恵を受けることを期待しての沈黙か。

18歳以下のすべての子どもへの10万円支給公約。動機付けになったのかどうか。税率の逆進性からすれば10万円は雀の涙。本来はもっと再分配されてしかるべき公費であるのに。現在の社会的地位に満足しきっているのだろうか。

「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として。二度目は喜劇として。」無条件降伏という敗戦や原発の過酷事故。敗戦経験者や歴史をしかと学んだ者には、2回も取り返しのつかない失敗から本気で考え直すモードになって当然だが、失敗の記憶を消去する力が働く現実。敗戦を身体感覚的に捉えていない人にとっては1回目。悲劇の次元の体験。しかし、これとても震災津波の結果と捉えることで人為を越えた天災としてスルーすることもできないことではない。痛みとなりにくい。学べない。学ばない。

2. 性差別意識 前回、私は日本社会で男として「損をしている／してきた」という認識をお伝えした。日本社会の男性として、多数派故の既得権益はある。優遇である。その反面、過度な稼得責任を自発的に担う中で、結果としての「働き蜂」を生きてきた。

20年前には突発性難聴に罹りながら、業務遂行を優先させた結果、右耳は聴力0。業務命令があったわけではないのに、である。診断書を出せば、入院加療は保障されていたはずだが、馬鹿な男性主義が自分の健康を疎かにした。仕事に穴をあけられない、という誤った認識ゆえ。その後の不便を馬鹿さ加減と共に生きている。

失ったものは健康だけではない。過度な稼得責任や

競争文化の中で失ったものもあろう。「働き蜂」ではない、「もう一つの在り方」が既に主流になっているという世界の現実。失ったものとしての自由であり、時間であり、ケア体験であり、地域から得られる学びであり、等々。恐らく「もう一つの在り方」を生きてきた人と実際に関わる中で発見できるものは多いだろう。洋画の中では間接的に出会ってはいるが。

幸い、ここ3年間、高齢の母親と同居する機会に恵まれ、ケア体験の時空が得られた。一人で抱え込むと介護虐待に墮す危険性もあろう。認知症には至らず、加齢とともに老化現象となったことが幸いであった。社会資源の活用をはじめ、きょうだいが一人関わっていたことも併せて。

勝れた先人は多々ある中で、ささやかながら限られたケア体験から得られた学びは機会があるごとに語っている。非暴力、当事者・共同決定等である。10年余の単身赴任生活での生活力の向上と相まって「もう一つの在り方」を常に意識し、できることから実行する生き方をしてきた。学生にも、このことは常に伝えてきた。正解主義を生きようとする若者への希望であり、お詫びとしての発信である。

3. 立法の遅れ その通り。「ざる法」の数々。遅々。ここでも議員構成の歪さが元凶。多様性を尊重する社会や組織は成果を上げているのは常識だが、浸透していない。周回遅れの走者をいつまで続けるのだろう。付けは「私」にも回って来る。来ているのに気づかせない？気づかない？少なくとも、選挙の争点にはならない。現職が既得権益を守るための活動をする。世襲制ゆえの限界か、あるいは議員の処世術か。有権者への信頼があればありえない話だろうが、持続しないのか。

「天の半分を支える」人びとが政策決定過程に参加していないこの国で、絶対的少数派の多様性が尊重されるはずがない。『女性のいない民主主義』である。今回の連続講座の主題。「おっさん政治」も少しずつ変化はしているが、遅々として進まない。この弊害がジェンダーギャップだが、「国難」と捉えられている感はない。

旧聞にすべきことではないが、「国難突破」選挙があった。少子化対策と北朝鮮ミサイル問題である。有権者の信を得た結果となった2大公約であったにもかかわらず、いまだ、両課題は進展なし。絶えず上書きされる情報社会にあって、有権者の政治感覚も常に上書き状態なのだろうか。主権者としての政治的教養の質が問われる。

4. 教育の停滞 以上は、根本的には学習や教育の土台が間違っているからの停滞現象。学習や教育の「商品化」が元凶。学びからの逃走、学びの忌避。学生の中には「意識高い系」を揶揄し、低次元の段階まで引きずり降ろすことによって努力することを避ける自己を正当化する者も。「お客さん」意識の学生も。

教員としては、すべての学生が「意識高い系」へと自ら変容するような関わり方、授業を展開するしかない。商品の効用は使用前には判明しない。しかも効き目は個人の領域。万人に効能が当てはまる究極の商品はない。学びに関しては究極の商品はある。自己学習、協働学習、集団学習である。これらの発信を目指しての非力ながらの40年間。実践報告は今なお意識的に発信中。評価は卒業生が行う。自身の仕事の自己点検を続けるつもり。卒業生が仕事や家庭生活を対象化する報告を発信している。

5. 納税意識 納税を通して、より合理的で公正・公平な社会づくりを選挙という仕組みを経て、議員を通して実現する。納税はそのための公金。使い方に関してもっと本気になることが必須だが、この点に関しても、市民の主権者教育が不徹底である。

実際には、納税義務を果たしながら、困難に陥ったら「自助」と言われる。菅元首相のように。「ぼったくり」と世間では言う。政治の世界ではなぜか、そのような下卑な言葉は使われない。政治を美化しているからか。ここでも「自己責任」が跋扈する。少しずつそのような風潮を作り、物言えぬ人びとを作り出す。見事な馴化政策である。禍政という言葉を実際に使う政治の不備。禍政に関わる人びとは、いつの日か自分がその対象になるなどといった想像力はこれっぽっちもないのだろう。あるいは、想像するからこそ、自分の既得権益をさらに補強するような政策を続けるのだろうか。生身の政治家とじかに話し合ってみたい。食住衣の基本についても。

要するに、納税意識を失った有権者は自在に扱われるということ。当事者にはその実感はないのだろうか。かつてのような暴力的な手法ではないのは当然なのに。歴史学習では禍政は暴力的な手法でなされていたことが映像的に焼き付いているのだろうか。法律という合法的な手法での執行。採択の際は、数の力で暴力的になされるのだが。可決されれば、次第に関心が薄れる。一連の抗いを持続している人びとは、尊敬に値する人間的に高貴な人びと。どこかで報われるべき人びと。現実はいかに。

6. 「自分ごと」 基本は「良くなる」ための行動をどれだけ原体験として体験してきたか。家庭での手伝いという「出番」、学校では、例えば、校則、授業内容や方法、いじめへの対応等々。家庭や学校で「自分ごと」に関する決定権限がどこまで与えられてきたか。子どもの権利条約が子どもを社会参加の主体であると謳っている。この点でも、日本は不十分な状態が続いている。

コロナ禍はこれまでの当たり前が当たり前ではなかったことに気づかせたという点では学びの契機となった。以前とは違う生き方が作り出せるかどうか。現場の人びとへの尊敬を名実ともに形にすることから。ケア労働の処遇改善も政策化される。3%が妥当

とはとても思えないが、最初の一步に。

7. 高い消費者意識 「返却不能な高額商品」としての議員。国会議員年収3,000万円。その他の議員への処遇は多々。費用対効果の観点から議員活動を評価する。選挙前だけでなく、常時権者が監視することが必要となる。

当選者は1票差でも当選する。熾烈な競争に励むのは当然。その競争の勝者を生み出す側になるのかどうか。有権者の選択である。最優先の選択基準は何か。常に動向調査と分析がなされている。

ジャーナリストで、衆議院議員も歴任した井戸まさえ『ドキュメント 候補者たちの闘争—選挙とカネと政党』（岩波書店、2018年）は、赤裸々な裏事情を明かす。候補者、あるいは議員の素顔が見えてくる。

私は、今回の投票率を希望をもって60%と読んでいた。ことによると65%近くもありか、とも。全くの認識不足。結果は55.94%。過去ワースト3。棄権者45%弱はなにゆえに。消去法という生き方は日常生活では当然のこと。有限の範囲内での最善の選択。「投票したい候補者がいない」という理由での棄権。そもそも選挙における切実感が不足しているということか。せめて選挙に関しては、最高の候補者に投票したいということか。不明。

投票当日。開票速報を翌日1時過ぎまで。途中から初めて民法ラジオで聞く。低投票率、市民連合の思いが期待ほどには伸びなかったこと、経済に関する質問には滔々と答える著名政治家がジェンダー等の質問に関しては、歯切れが悪いという実態を再確認するなど、寝つきが悪かった。朝の目覚めに異変。めまい。何とか車で病院へ。点滴2本を打つ始末。原因は不明。衝撃が身体にまで及んだということだとすれば、私以上に身体的に異変を起こしている人々もいるだろうと、お見舞いの思い。

選挙本を読む。アダム・ブシェヴォスキ、粕谷祐子・山田安珠訳『それでも選挙に行く理由』白水社、2021年。様々な国の過去200年にわたる例からの分析に基づき、選挙の本質が語られる。端的には「結局、民主主義の奇跡とは、対立する政治勢力が投票結果に従うということである」「いわば、ルールある紛争、すなわち殺戮のない紛争である。投票用紙とは紙でできた『石つぶて』なのである」「投票は『力こぶをつくること』と同じ、つまり、起こりうる戦争の勝率を予測できることに匹敵する」。

著者の論述には納得することばかり。だが、疑問もわく。低投票率の場合。棄権者はどのように意思を示すのか。本当に政治状況を変えないと救われない人ほど投票に参加できにくいという現実も。投票義務化論議も含めて課題は続く。

8. 日常の政治化、政治の日常化 地元市議会の傍聴。3回。原稿読み。丁々発止といった、学会ならありうるような質疑応答には出会えず。本気度は伝

わってきたが。共通の主題が多く、それだけ大事な案件ではあるが、地域の実情に根差した課題はほかにあると思われた。ジェンダー、女性の政治参画などは話題にならず。宇部市議会、「全会一致での決議」以後、市政改革の本質を理解し、久保田議員に賛同する議員も出てきたのではないかと。併せて、市民の傍聴者は増えたはず。それが旧守的な議員への牽制になったのではないかと。

偶然、NHKラジオ第一放送（11.11）。最高裁判事の国民審査の結果。合憲判断と違憲判断とで、1%の有意差があったという。60万人の差。1%であったとしても、重要な司法判断を求められた場合に、判断する裁判官には有権者の目があること、有権者の目が時代や社会の本質的な物差しに基づくものであることを改めて実感する機会となったはず。不十分極まりない、現在の仕組みをさらに有効にするための諸改革は必須であり、併せて、有権者の投票行動、ここでは審査行動が求められる。棄権者44%の有権者が後悔していれば、有難いこと。

選挙や政治の本質は、投票前後の長い政治活動の期間に対する評価。平均2年半の衆議院議員、6年の参議院議員。長い目で評価する意識を有権者は持ち続けることができるかどうか。「落選運動」は、自覚的な有権者の優れた行動。秀れた効果を発揮することが期待される。

9. 全体的感想と追加質問など 言葉が届く、久々の体験も。（中略）ドイツの学校教育でのデモの件も、参加者には衝撃であった。会場の雰囲気の違い。私には、その衝撃がいささか残念だったけれど。グレッタさんの活動は世界的常識になっているはずなのに。『長靴下のピッツ』の現代版。

他方、デモに参加すると就職できない、などといった発言もあるほどの日本。21世紀のこの段階で。気候変動危機、核兵器禁止条約への対応等、地球標準、世界標準の次元に到達できていないということ。未来世代に限らず、子や孫たちの世代にも顔向けできるのだろうか。

以下、質問の追加。（略）対話型政治が有効であること、あるいは必要であることは、コロナ禍での先進的なリーダーたちが示した通りだが、科学的根拠・合理的な証拠等を踏まえた、人間の安全保障の観点に根差しているからこそその優れたリーダーシップであった。形だけを真似する向きがないか、実質を問いつけることが有権者として必要になる。旧態依然とした組織や風潮を変えるのは、外からの力。「風の又三郎」のように。日本は「外からの改革」には弱い。「内からの改革」のできない、難しい国民性があるのだろうか。「外者」への偏見や壁はどうやって超えていったのか。

私ごとでいえば、教育実践では常に課題は内にあるので、それに気づくかどうか問われてきた。今で

も。学生との関係がフラットで、オープンである限りは改革は常に起こりうる。多様性が問題を深く、広く問い、より高次の次元へと小さな一歩を生む。一つの成功体験となる。そのような実感を少しでも保障できたとすれば、教員としての役割の一端はささやかであっても果たせたと思う。

象徴的事例。ある年の卒業式パーティーでの余興。学生が教員のもの真似をする。ある学生が真剣な顔でいう。「仰る通りです。」笑いが起きる。本人の私には意外な驚きであった。学生の言動に真や理があれば当然の応答。だが、私は少数派だったよう。あるいは、別の学生。「何をしてもしっかり根柢をもってやってもらった」と。これまた、有難い励まし。授業ごとのフィードバック、レポート、答案へのそれも含めて。これまた、少数派。教員を越えていく学生の姿は教員をしてさらに仕事へ自覚的になる契機。学生は「教師の教師」であるということの見本。常に質問を持つことも学生に期待してきたこと。若い人に求めたことは、自らにも求め続ける。

式典の際の来賓によるお辞儀の時間節約。快挙。儀式の本来の主旨を最優先する。さらに波及効果が生まれますように。会議でもしかるべき反応があれば、議事は速やかに進行する。根回し方式は不可だが。複数の会議主催者として、私なりに事前資料配布に努め、実質を取り、短時間で終えることを意識したことも。(中略)

10. 余談 総理府の男女共同参画の目標であった「202030」も未達成。組織文化が変わる分岐点である3割を女性が占める政策を目指しながら、結果は未達成。達成年度も明示しないままで先送り状態。

菅首相が任命拒否を続けている日本学術会議では女性会員率は3割を超えている。他方、内閣は22人分の

2。「2030」も、本来ならば「30」ではなく「50」であるべきそれ以前の目標すら達成できていない。

あらゆる個人的なことは政治的なことである。理想とすることがらは、政策として実現しない限り、理想にとどまる。むしろ、矛盾が拡大再生産されるのが落ちである。辛苦を体験したが故に物事の本質を嗅ぎ分ける能力を体得された先人に倣って、それぞれの経験の総体をもって実年数分の責任を果たす生き方を続けることが「私」の責任である。

コロナ禍は最終的には一人ひとりの人間としての自覚度を問う。代金の一部を税金で補填する政策が実行され、利得感情を刺激されて予定外の旅行を実行する人びとも皆無ではない。賛否が分かれる政策は熟議をもって対処するしかない。熟議は結果として早期のより良い対策を生む。「不要不急の」と喧伝されるが、本来は、重要緊急の責務が政策立案側の責任ではないのか。そのような状態を生み出すためには、市民の、市民による、市民のための参画民主主義の実現を置いているのではない。しかもそれは与えられるものではない。獲得するものであり、倦まず弛まず不断努力によって実現するしかない。永遠に未完の取り組みとなる。それを実現する学びは、学びが現実社会を改善するという信頼に支えられていることが肝要である。

当日は、終了時間過ぎてまでの対話的講演。初めてのこと。快挙。これまでは終了時間を読んでか、司会者共々、質問を遠慮する空気があった。今回は講師がその弊を打破して下さった。退職帰省後、一連の講座にはほぼ毎回参加してきたが、コロナ禍対策としての紙媒体方式では、質問をスルーされる講師もあるなか、今回は短いやり取りの中で追加で補足していただき感謝。誠実に対話され、自治体の長を長年勤めるといふことの意味を感じ取った。